

宝島

宝島

作・角ひろみ

宝島

「あらすじ」

そう遠くない未来。

北とある岬。

海洋実験場の監視塔と廃止灯台と崖を望む小さな平屋。

とある企業の最北支社の寮。

単身赴任の男がいなくなった。

部屋はゴミの山だった。

妻が西から駆けつける。

旧友たちも連峰を北上する。

彼らは大学時代のワンダーフォーゲル部員である。

灯の消えた海村はそろそろ初雪――。

：海洋冒険小説のアレとは真逆の、夢とロマンあふれない宝島。

狭い小さい凡俗なサバイバル。

「ねらい」

寮のゴミ部屋ひとつで、どこへも行かずに些末な冒険がくりひろげられる。

失踪した夫をめぐる妻と同僚たちとの会話と、夫と女たちとの行き交いと、ワンダーフォーゲルが全てその部屋で行われる。

汚くてコンビニエンスで猥雑な中から宝のありかや宝のなさが見えてくる宝島。

宝島

「登場人物」

妻 (内田の妻)

土井 (内田の同僚)

松下 (内田の部下)

守 (内田の弟?)

食堂の女 (いずみ)

女子高生 (秋)

コンビニの女 (王)
ウオン

広岡 (ワンダーフォーゲル部)

高川 (ワンダーフォーゲル部)

福長 (ワンダーフォーゲル部)

旅の男

旅の女

内田

○妻と土井 1

そう遠くない未来。

北の岬。

ある企業の最北支社の寮。小さな平屋。居間。閉じた薄カーテン。万年床。くしゃくしゃの山並のような掛け布団。

布団のすぐ横に机代わりの段ボール。

その他いくつかの段ボールと衣装ケースと小型テレビ。

コンビニ弁当やカップ麺や飲料などのゴミの山、衣服や下着の山、雑誌や紙ゴミの山、吸い殻の山、コンビニ袋（ライフマート）の山。

10月半ば。正午過ぎ。40代ぐらいの女（内田の妻）が立っている。

手荷物と大きな土産袋を持ったまま、手袋をしたまま、長丈の防寒着を着たまま、マスクをしたまま。息をつめている。

土井、スーツの上に白い作業着を羽織っている。右手に包帯。

妻
：嘘。

妻、マスクの上から鼻と口を手で覆う。

土井
そのままにしてありますんで。

妻
そのまま？

土井
触ったり探したり、一同僚の私が勝手にするわけにいかないですし。

妻
ああ、そっか、はい。

土井
なのでまずは内田さんの、奥さんにかけてご連絡を。

妻
はあ、ええ、はい。

土井
遠いところすみません。

妻
そんな、主人こそ。

土井
大変だったでしょう、この地へ来るのは。

妻
ええ、列車も飛行機も本数なくて。

土井
ねえ、地元の人ももう少し少ないですから。

妻
こんな地の果てで働いてたんですね、あの人。

土井
地の果てですか。

妻、ゴミのいろいろを見ている。探すように。

妻
なんなんやろう…。

短い間。

妻
から揚げ弁当、にぎわい幕の内、スペシャル白身フライ弁当、プレミアムロールケーキ、苺と生チョコペアケーキ、

極旨、のどごし生、ポテトチップスうすしお、なげわ、

ホープ、ホープ、ホープ、ホープ、カップスター、ごつ盛り、一平ちゃん、

妻、手で覆ったままブツブツとつぶやく。ゴミの名前。

土井
あの、奥さん？

妻
ねえ、土井さん。

土井
はい？

妻
土井さんは、…泳げますか？

宝島

土井 え？ まあ普通には。

妻 私、泳げないんです。やから泳げる男の人、懂れます。

土井 え、はあ、えっと？

妻 あの人、泳ぐの上手やって。

土井 へえ、そうですね。

妻 結婚する前、神戸から淡路島の海へ旅行したことあって。

土井 そんな時も、遠くまで一人で泳いで行って。どんだけ息が続くんやろってくらい。

土井 ほんでケロリとまた浜へ帰ってきて。いうてももう10年も昔のことですけど。

土井 そうですか。

妻 ねえ、土井さん、息をとめて、

土井 はい？

妻 息をとめて、人は、どんくらい耐えられるんでしょうか。(もう結構苦しい)

土井 え、息、さあ、わりと短いですよ。

妻 息が苦しくなるのは、どこが苦しんでるんでしょうか。

土井 どこって、

妻 私ね、今実験して見てるんです。

土井 脳みそが苦しいって、本能で感じるんが先やるか、胸が苦しいって、体で感じるんが先やるか、もしかして、その苦しさを超えたら何か次のステージみたいな新世界とかあるんやるか？

土井 奥さん？

妻 試してみてるんです今。けど、臭い、臭い、汚い、限界。

妻 妻、窓へ。カーテンを開ける。曇天。掃き出し窓から海と崖を望む。

妻 窓を開ける。遠く波が崖に碎ける音。

妻 うえ、

妻 妻、空吐き。

妻 たまらん。

妻 風が吹きこむ。

妻 寒。やっぱり厳しいわね。北国の風は。

土井 ここは特に。海風の吹きっ晒しですから。

妻 そやねえ。

土井 ましてこんなに曇った日は。

妻 短い間。

妻 あ、岬のあそこ。

土井 ああ、あれが監視塔です。

妻 内田さんと私はあそこに詰めてました。つい4日前まで。

土井 ううん、塔じゃなくて。

妻 その向こうの灯台？

土井 ううん、ずっと先よ。岬の突端。

妻 え？

妻 あの人。(指さす)

宝島

波が行って帰る。

土井 や、誰も。

妻 ほら、あれ。ずーっと突端。

土井 あれは防人岩。遠くからだと男の立つ影に見える、昔の岩です。

部屋のゴミの山の中に、大きな登山ザックを背負った男が入ってきて、立つ。

妻 違う、岩の向こうよ。

土井 いませんよ。あの先は断崖。柵があつて立ち入れません。

また大きな登山ザックを背負った別の男がごみの山を踏み分けて、入ってくる。すると最初の男はいなくなる。

妻 でも、だってほら……。 (指さす。土井の肩に触れながら)

土井 奥さん……。 (妻の背に触れる)

妻 見えない？ あそこ。

土井 気持ちわかりますけど。

妻 え？

土井 いてほしい気持ちはわかりますけど。

妻 いる。大きい荷物背負つて。どこへ行こうとしてるんやろか。

そうする間に次々登山ザックを背負った別の男が歩いてきて、前の男と立ち替わる。

妻 ねえ！

妻、掃き出し窓から一步降りる。

土井、ぐつと手を引き止める。包帯の手で。

土井 奥さん。

妻 え、土井さん。

土井 ……裸足。

妻 ……あ。

妻、ゆつくりと土井の手を引き寄せて、一步室内へ戻る。

なんか妻と土井、見つめ合つたまま。

妻 ……どこへ行こうとしてるんやろか。私。

2人の背後で、最後の男が遠く指さす。

内田 ……宝島。

大量の海鳥の声。飛び立ってこちらへ来て空を覆う。

また寒風が吹きこむ。

男などいない。

妻と土井、サツと離れる。何事もなかったように。

妻 ごめんなさい、今のは私の妄想です。 (土井に)

妻、窓を閉める。

プツンと切れるようにすぐ次。 (暗転なし。チャンネルを変えるような短さで。この転換以降も)

○妻と土井と松下

宝島

妻、鼻と口を手で覆って立っている。
荷物を持ったまま、防寒着を着たまま、マスクをしたまま。
少し離れて、土井、大きな土産の箱を手にして立っている。
戸口に、女（内田の部下の松下）が立っている。
事務服に防寒着を着て、お茶の盆を手に。
松下 どこに置いたらいいですか。土井主任。
妻・土井 あ、
土井 あじゃ、ここへ、（机代わりらしき段ボールの上の紙ごみの山をよけながら）
置いてもらえますか？
松下、盆ごと置く。表情ひとつ変えず。
土井 ……ありがとう。
妻 ……すみません。
松下 いえ。
妻、置かれたお茶を見る。
土井、よけたゴミのやり場にちよつと困って、床のゴミと一緒にして置く。
妻、ゴミを見る。
土井 あ、そ、彼女、松下です。
ちようど内田さんの半期前に本社からこつちに赴任してきたんで、もう2年か、
1年7カ月、支社の庶務やら記録全般を。
松下 松下です。
妻 （妻、手を覆いやめて）この度はえらいご迷惑を、すみません。
これ、奥さんから。（大きな土産の箱を渡す）
松下 ……
妻 旅行へ来たわけやないのに、お土産いうんも変な話ですけど、支社のみなさんで、
支社って言っても5人なんで。内田さんを含め。
妻 あ、ごめんなさい、何人いてはるか知らなくて。
松下 ……
妻 空港でバタバタと買ったので、つまらないもんですけど。
松下、土産の包みを開く。表情ひとつ変えず。
妻 ……あ。（小さく）
……松下さん？
松下、箱を少し開けて覗き、包まれた饅頭を2個出して盆に置く。
松下 どうぞ。
妻 ああつ、……どうも。
土井 ま、ね、奥さんとりあえずほんと座りましょう。（ゴミをよけながら座る。）
妻 ……はい。
土井 着いたばかりでいろいろ動転しておられると思いますし。
（座る。ゴミをよけながら）
妻 ……はい。

宝島

土井 (手を上げて) 暖房の風、こつちよく来ますんで、ここどうぞ、座って、

松下 (手を出して) お茶、どうぞ。

妻 あの、私、ちよつとこういう汚いの駄目なんです。

いや、お茶の話じゃなくて！ こういう、不潔なとこ座ったりとか苦手で。

私たちも決して得意なわけじゃないですよ。

妻 あの人がこんなん、もう考えられないんですけど。

私、こんだけ汚いともう混乱して、手え震えて。

なんや汗出てくるし、気分悪なつてきて。

大丈夫です奥さん？ ちよ上着脱がれた方がよくないですか？

土井 だいぶ暖房効いてきたし。

妻 ああ上着、

妻、荷物を足に挟む。変。

その体勢で手袋を脱ぎ、防寒着のポケットにしまふ。防寒着を脱ぐ。

妻のお腹が大きいことがわかる。妊婦にしては大分高齢。

土井と松下、ついお腹を見てしまふ。

妻 …上着。

妻 脱いだが、置けない。

妻、部屋を見渡す。

また荷物を持ち、上着を抱きかかえて立っている。

土井 松下さん悪い、事務所からハンガー持ってきてもらえますか？

松下 …はい。

妻 片付けないと…、まず片付けないとねえ…。

土井 松下さんあとゴミ袋も。なるだけたくさん持ってきてもらえますか？

松下 ないですゴミ袋。

土井 あるでしょうロッカーにストック。

松下 ちようど切れかけてたところですよ。

土井 じゃ悪い、買ってきてもらえますか？ ライフマートで。

松下 ライフマートまで降りてる時間ないですよ。

土井 や車でサーツと。

松下 時間ないですよ。土井主任、

土井 はい。

松下 監視塔、今、梅本くん一人ですよ。

土井 や知ってますよ。

松下 この4日間ぎりぎりの体勢ですよ。全員寝不足ですよ。

ゴミ袋より先に対処すべきことあると思います。

土井 します。順を追って。ね、してますから松下さん、とりあえず事務所からハンガ

ーと、あとごみ袋を、車でサーツと。

松下 時間ないですよ。(行く)

土井 松下さん、

松下、去る。

宝島

土井 松下さん、

○妻と土井2

妻、また上着を着かけて、

妻 土井主任、

土井 え、

妻 私買いに行ってくださいます。

土井 や、奥さん？！

妻 ライフマートの場所教えてもらえたら。

土井 いいです、奥さんはまず話を。ね、先に探す対処を。

妻 でも車でサーツと、車お借りできればゴミ袋を。

土井 ゴミ袋後にしましょう。

妻 でもでも私、ゴミがあると。

土井 奥さん、ゴミについては何とか一旦、心頭滅却してですね。

妻 しんとうめつきやく？

土井 そ、心を消し去って、一旦ここは美しい：森かなんかと思って話しましよ
う。

妻 え、え、森？（怪訝）

土井 なんかこういい香りで癒されるような？

妻 ほら「心頭滅却すれば火もまた涼し」ですよ。

妻 え、はあ、そうかしら…。

妻 土井、妻に手を差し出す。包帯の手。

妻 はい？

土井 上着と荷物を。

妻 でも、（汚い）

土井 床の上、いや、森の土の上には置かないんで。私でよければお預かりします。

妻 え、ああ…。

妻 土井、もう伸ばした手を上着に触れている。

妻 妻、抵抗がありつつも渡す。

妻 どうも…。

妻 土井、座った膝の上に上着と荷物を置く。

妻 妻に両手で湯呑を渡す。

妻 ああ…。

妻 妻、抵抗がありつつも湯呑を手にする。

妻 土井、ゆっくりと湯呑を手に取り、お茶を飲む。森（？）を眺めながら。

妻 …はあー（小さく吐息）、で、奥さん。

妻 はい。

土井 本当に、心当たりないんですか？

妻 …。（うなづく）

土井 誰も？ どこも？

妻 …。（うなづく）

宝島

土井 今までと変わった様子とかなかったですか？

妻 …。(首をふる) さあ、離れて暮らしていると…。

土井 最後に連絡とりあったのはいつですか？

妻 最後？

土井 や、悪い意味じゃなくて、一番最近はいつですか？

土井 短い沈黙。

土井 奥さん？

妻 …ひと月前です。

土井 え、ひと月？ 結構前ですね。

妻 9月15日の、あの人の誕生日に電話を。

土井 それ以来急に途絶えたんですか？

妻 …。(首をふる)

急にとかではなくて、

単身赴任した最初の頃は、毎日電話くれてたんやけど、近頃はそんな頻繁に連絡もなくて。私からかけてもたいがい、元気にしてるとか、もう寝るとか、そういう短い確認みたいになってしまってます。

土井 そうですか。

妻 でもまあ、それがごく普通になってきて。

土井 普通、ですか。

妻 普通、やないかしら？ 土井さんは、奥さまにもっと頻繁に連絡を？

土井 や、私結婚してないんで。

妻 ああ、ごめんなさい。

土井 いえ。

妻 私らは、誕生日の電話でも、まあ普通に…話して。

晚ごはんは町へ降りて何ちゃら食堂で食べたやら、そんな短い普通の、…普通の話でした。

土井 そうですか。

妻 まさかこんな暮らしやなんて私。電話じゃあ見えへんしねえ。

土井 ですね。

妻 ねえ、土井さん。見えへんのは、恐ろしいわねえ。

土井 はあ…。

掃き出し窓のすぐ外を60歳ぐらいの年配の女(旅の女)が歩く。
ふらりとした足取り。

妻 わ、(小さく) あれ、今そこ、女の人が。

土井 (窓にそっと寄って見て) ああ、旅行者でしょう。

妻 (窓に寄って見て) ああ、旅行者ですか。

土井 こんな所に旅行者、来はるんですか。

妻 や、ごめんなさい。

土井 灯台へ行くのにそこ通って行く人がいるんです。

宝島

道からちゃんと行くと大回りだから。

妻 ああ、そうですか。灯台、中へ入れるんですか。

土井 廃止灯台でもう使われてないんですけど、展望台になってるんです。

うちの会社のプラントや海洋エネルギーの実験場を見にくる人もたまにいますよ。あと、海で亡くなられた方のご遺族とかも時折。

妻 そうですか。私それこそ一瞬亡霊かと。あんまりふわーと歩いて行かはずだから。（少し笑って）ないですよ、そんなことは。

妻、窓から離れる。

土井、ゆつくりと湯呑を手に取る。

土井 ……で、内田さん、…他に何か話されてなかったです？ ……仕事の話とか。悩みごととか。

妻 他に？

土井 や、他に電話で。

妻 ……。（首をふる）

土井、またお茶を一口飲む。

土井 ……はあー。（小さく吐息）

妻 土井さんは、何か、あの人のこと、気づいてました？

土井 え、気づいてたというのは。

妻 や、こちらでの生活では、一番長いこと近くにはったから。

土井 ああ、まあ、そう、…でも…特に。…何も。

妻 最後に一緒やったのはいつ？

土井 最後…、

最後は、4日前、いや5日前になるんですかね、日暮れから夜明けまで、あの監視塔で、二人組で仕事しました。

…通常通り終わって、関根と梅本という二人に交代して、で、内田さんと私、一緒に歩いてここへ戻ってきて、あ、隣の平屋、私の寮なんですけどね、というかこの並び5軒、全部うちの支社の寮なんですけど、私ん家の玄関前で、「お疲れさんー」って内田さん、…まあいつもの、普段通りで別れました。

ゴミの山の中に、風采の上がない男（内田）が入ってくる。

白い作業着に銀縁眼鏡。ライフマートのコンビニ袋を下げて。

土井 で、次の交代のときには内田さん、現れませんでした。それっきり。

内田、床に座る。コンビニ袋から弁当（からあげ弁当）を取り出す。

袋などは当然のようにゴミの山に捨てて。

妻 そう、普段通り、おかしいわねえ…。

内田、ゴミの山の中からリモコンを取り、テレビをつける。

試験電波発射中のテロップとカラーバーの画面と発射音。

土井、また湯呑に手を伸ばす。

土井 あっ、

湯呑が倒れる。

宝島

妻 あつ、

土井 あ、あ、あ、

妻 あ、あ、あ、あ、

土井 土井、慌てて、こぼれたお茶を拭き払う。包帯の手で。

妻 妻、慌てて、持っていた湯呑を段ボールに置き、ティッシュを探す。

妻、布団の枕元にティッシュ箱を見つけて、何枚かティッシュを取って、こぼれたお茶の上に。ふわふわと。

土井 ごめんなさいごめんなさい。

土井、そのティッシュで拭く。

妻も拭く。床に膝立ちになっている。

内田、それらの様子を見ながら、コンビニ弁当を食べている。

深夜テレビを見るかのようにぼさーっと。

土井 上着と荷物は死守したんで。大丈夫なんで。(上着と荷物を渡す)

妻 いいですいいです、そんな。(上着と荷物にもう一方の手を伸ばす)

土井 濡れてないですから。

妻 でも、包帯が、

土井 あ、

妻、ティッシュを持った手を、土井の包帯の手に。

妻 土井さん、

土井 え、奥さん、

妻 怪我ですか？ 手。

土井 いえ、ちよつとした、…火傷です。

妻、ぐつと握るように拭く。

土井 …痛。

土井 そのまま、なんか妻と土井、見つめ合ったまま。

土井 奥さん、

妻 はい。

内田、咀嚼している。

土井 もう、座ってしまいましたよ。

妻 え、

土井 汚い床。

妻 …あ。

土井、手を引き離して立ち上がろうとするが、妻、ぐつとつかんで離さない。

警察に言った方がいいかしら。

警察。

妻 捜索願、あの人の。もう4日やとやっばりさすがに。

土井 微妙ですよ、4日って。

妻 生きてるんかどうか。

土井 そう簡単に死ぬでしょうか？ 大人の男なら4日くらいどこかで。

宝島

妻 どういう意味ですか？ それ。

土井 意味とか別に。でも、あ、そうだ、奥さん、

妻 はい。

土井 やっぱりひとつ、気づいてたことありました。私。

妻 何。

土井 …私、内田さんに、お金貸してます。

妻 …え。

妻 お金。

土井 いくら。

土井 ちよいちよい、何度かで、結構。

妻 何のお金。

土井 子供さんの。治療の。

妻 え、治療って、

土井 子供さん、どこかお悪いんですか。

妻 子供…、いません。…まだ。

井 手、震えてますね。すぐく。

妻 言うたでしょ私、不潔なん苦手で、手え震えるって。

土井 ああ。大丈夫ですよ。奥さん。落ち着いて。

妻 土井、もう片方の手も妻の手にぐつと。震えを包みこむように。

妻 …痛い。土井さん、土井さん！

妻 土井の懐で携帯が鳴る。

妻 内田、テレビを消す。

妻 妻と土井、サツと離れる。妻、立つ。何事もなかったように。

妻 ごめんなさい、今のも私の妄想です。(土井に)

妻 妻、握っていたティッシュを、ゴミの山にぼろりと捨てる。

土井 いいえ、私の妄想です。(妻に)

土井 土井、拭いたティッシュをひとまとめにして、同じゴミの山に捨てる。

土井 内田、弁当がらをゴミの山に捨てる。

土井 (小声) はい。…はい。…や、まだです。…や、それもまだ。

土井 …はい。…はい、行きます。や、こつち片付いたらすぐ…はい。はいー。

土井 内田、窓の外を見ている。

妻 土井、電話を切って懐へ。

妻 妻、窓の外を見て、

妻 わ、雪。

土井 あほんとだ。

妻 結構降ってる。

土井 おー、初雪ですよ今年。

妻 そうなんですか。

土井 ずい分早いなあ。私こつちへ赴任して来て4度目の冬なんですけど、10月半ばに雪なんて初めてです。

宝島

妻 あ…。土井さん、私もひとつ、思い出しました。

土井 何を？

妻 変わったこと。誕生日の電話であの人、そういえば言ってた。

もうじき、みんなに会いに行くんだって。

土井 みんな？

妻 神戸の、大学の部活の。

土井 何されてたんですか？ 部活。

妻 ワンダーフォーゲル。

プツンと切れるようにすぐ次。

○ワンダーフォーゲル部¹

うす暗い中。(同じ部屋)

3つの熊よけの鈴の音。重く遅い足音。道が悪い。

銀縁眼鏡の3人の男の山行。

大きな登山ザックを背負い、トレッキングストックを持って山装備。

だが、冬山装備ではない。

あちこちに泥擦れと引き裂きのダメージ。

3人の息 …ハア、

…ハア、

…ハア、

…ハア、

…ハア、

…ハア、

高川くん、肩は大丈夫かろう？

高川 大丈夫ちや、広岡くん。(肩を押さえながら)

広岡 福長くん、脚は大丈夫かろう？

福長 大丈夫たい、広岡くん。(脚を押さえながら)

広岡 高川くん、福長くん、もう何日目かろう？

高川・福長 だ…、大丈夫ちや(たい)、広岡くん。

3人、温厚なごく小さな声。体力のセーブに努めているような。

最後尾に広岡、先頭に高川。

広岡 だんだん日が落ちてきよーる。

高川 雪までちらついてきちよー。

広岡 今夜はこの辺でビバークしようか。

高川 いや、広岡くん、もうちくつとだけ歩かんがか。

広岡 高川くん、そりやあ危険じゃろう。あの滑落でコンパスも地図も失った。

パーティからはぐれてしまった。僕らが今どこにおるんかもわからないのに。

地図は失のうたけんど、広岡くん、僕らあにはまだ勘が残つちよる。

ここでビバークは危険ちや。足場が悪すぎるき。

もうちくつと歩いて、避難小屋を探そうやあ。

広岡 先をゆく方が危険じゃろう。きみも福長くんも怪我を負ってしもうた。

宝島

もう相当体力を消耗しとるけえ。

福長 大丈夫たい、広岡くん。

高川 そうちや、福長くん。日が沈みきらんうちに歩こうやあ。この森を抜けるまで。

広岡 森を抜けるって？ え、高川くん、…何言よーるん。

森なんてどこにあるん…。

高川 え、広岡くん、…何言うちよるん、今僕らあが歩いちよるこの森やいか…。

3人、見上げる。

広岡 まさか高川くん、幻覚を見よーるんかの。

高川 幻覚？

広岡 ここは森じゃねえ。すでに森林限界じゃ。森はもうはるか麓じゃろ。

足を元を見てみい。岩と石だらけのガレ場じゃ。

まさか、広岡くんこそ、幻覚を見ちよるろう。

高川 僕が幻覚？

高川 頭上を見てみいやあ。トドマツに囲まれちよー。なあ福長くん？

福長 ああ。

広岡 何言よーるんな2人して。(笑って)

頭上は空じゃ、木なんか一本もねえ。夕暮れの空じゃろう。

福長 広岡くん？

高川・福長 広岡くん広岡くん広岡くん広岡くん！

福長、ザツクのポケットからチョコを出して、広岡の口に放り込む。

福長 ほれ、チョコば食べんね！

広岡、咀嚼して、

広岡 ああ、でーれー甘え！

福長 やろう、甘かろうもん。

高川・福長 広岡くん広岡くん広岡くん広岡くん！

高川と福長、広岡の頬を叩きまくる。

広岡 ハッ、そうなん？ 僕かあー。幻覚を見よーたんは僕じゃったんかあー。

福長 大丈夫ね？ 広岡くん。

広岡 大丈夫じゃ、福長くん。

高川 歩けるがか？ 広岡くん。

広岡 歩けるけど、高川くん、

高川 ほうよね、どうするがかえ？ 進むか、留まるか。

雪風。

広岡 なあ、もし内田リーダーじゃったら、今どう決断するじゃろう？

高川 リーダーやったらかー、ほうよねー。

福長 リーダーやったらー。

3人、顔を見合わせた後、無言で進む。ストックをついで。

3人の息 …ハア、

…ハア、

…ハア、

宝島

…ハア、
…ハア、
…ハア、

広岡 約束じゃけえな。

高川 記念やきね。

福長 無謀やばってんね。

広岡 サバイバルじゃけえな。

高川 アドベンチャーやきね。

福長 あっちからとこっちから、

広岡 南下と北上、

高川 続く連峰を尾根伝いに縦走して、

福長 会うんやけんね。

広岡 会うんじゃけえな。

高川 会うんやきね。

歩きながら広岡、ストックを挙げて、

広岡 ワンゲル歌集Ⅰ、第17番ヨーイ。(掛け声)

高川・福長 ヤッサー。(ストックを挙げて)

「フニクリ・フニクラ」

3人、歩きながら歌う。(音楽なし)

高川は肩を押さえ、福長は脚を押さえながら歩く。

1番を歌い終えると、

ブツンと切れるようにすぐ次。

○妻と松下

妻、上着と荷物を手に立っている。

戸口に松下、大量のハンガーを抱えて立っている。

松下 どこに置いたらいいですか。

妻 あの、えらいたくさんですね。ハンガー。(少し笑って)

松下 …。

妻 や、土井さんがたくさんって言わはったのは、

ハンガーやなくて、ゴミ袋やったと思うんですけど。

松下 …。

妻 いや、違うんですよ、たくさんありがたく思ってるんですけど。(少し笑って)

松下 どこに置いたら、

妻 あっ、置かないでいいんで。(両手を出して) 私もらいます、全部。

妻、受け取ろうとする。

松下、渡そうと両手を差し出す。

が、床に落とす。バラバラと。顔色一つ変えず。

妻 あ…、

松下、拾わない。

妻 ハンガー…。

宝島

松下 …ハンガー。

妻、ハンガーを1本のろのろと拾う。震える手。

松下 汚れてますか。

妻 …いえ。(少し笑って)

松下 菌とかカビとかついてますか。

妻 …いえ。(少し笑って)

松下 コート、(手を伸ばして)

妻 …え。

松下 かけないんですか。

妻、震える手でコートをハンガーにかける。

どこへ吊るそうか少し困る。

本来衣服がかけられていたらしき壁の釘に吊るす。

松下 荷物、(手を伸ばして)

妻 …。

妻、荷物を床に置く。

松下 あーあー。

妻 せっかく守ってらしたのに。ここまでずっと。

松下 もういいです。

妻 大変ですよ。

床の上の汚ない物質が、かばんの底に浸透して、だんだん上の方の生地まで浸食してって、最終的にはかばん全体に蔓延してしまいますよ。

妻 何でそんなこと。

松下 どんなのかなーと思ひまして。

妻 どんなつて。

松下 潔癖・つて。

妻 潔癖とか、違うんで。

松下 大変ですね。

妻 関係ないです。

松下 ですね。

松下、床の内田の上着とハンガーを拾って掛ける。

妻 いいです、そんなことして頂かなくて。

松下 触れないんでしょう、汚れもの。

妻 大丈夫ですそんなん。時間ないんですよね？ もう行って頂いていいんで。

松下 大丈夫です。今土井が行ってるんで。

私頼まれたんで。平気なんで。触るのも全然。

松下、また床の上着を取る。

掃き出し窓のすぐ外を60歳ぐらいの年配の男(旅の男)が歩く。

さつき旅の女が通った方へ。ふらりとした足取りで。

妻、つい見てしまう。

松下、上着をパタパタと払う。

宝島

妻 ……

妻、払われた空間を見ている。

松下、払った上着を淡々とハンガーにかけながら、

松下 浮遊していますか、何か。

妻 何なんですか、一体。

松下 何でしょうね、一体。無数の浮遊物。

妻 そういう話じゃなくて。

松下 けど、見えてるんでしょう、奥さんには。私には見えないんですけど。

妻 私にだって見えてないですよ。

松下 でも、やっぱり空気は汚染されてますか。

妻 え。何が言いたいんですか。

松下 ずっとマスクされてるから。

妻 これは、

松下 先程ごあいさつした時も外さずに。

妻 これは私…、ちよつと風邪気味やし。

松下 みんなそう言います。遠くから来た人。

妻 でも私、

松下 他の人よりも清潔で尊いお身体を守るためですか。

妻 そんなん違います！

私…、（お腹に手を添える）ほんとに今、いろいろ予防とかも必要なんです。

松下、妻のお腹を冷ややかに見る。

松下、防寒着を脱ぐ。

妊婦である。

妻 ……

妻よりも少し小さいお腹。手を添えて、

松下 可哀想な子ですかね。予防とかしてない。しきれない。

妻 ……

沈黙。

妻、マスクを外す。震える手。マスクを強く握りつぶして、ポケットへ。

妻、臭いと浮遊物を強く感じて吐きそうになる。が、飲み込む。

松下、ハンガーを取り、自分の脱いだ上着をかける。

妻 出て行ってください。

松下 ご自分の部屋みたいに言うんですね。

松下、さつき吊るした内田の上着の上に自分の上着を吊るす。

ゆつくりと、重ねる。

妻 主人の部屋なんです。

松下 初めて来られたのんですか。

妻 何で初めてとか、

松下 亭主の赴任先の支社の人数も知らない奥様ですし。

妻 そんなこと、全然大したことやないんで。私ら夫婦（言いかけて）…、

宝島

うちらには。

松下 赴任して1年間、一度も家族が会いに来ないって、大したことじゃなかったんでしょうか。内田さん。

また床の服を手に取る松下。作業着である。白いジャンパー。
松下、ゆっくりと畳む。

妻、それを冷ややかに見ている。

妻 あの人が来るなど言ってたんで。辞令が下りたときからずっと。

松下 何でそんなこと言ったんでしょうかね、内田さん。

妻 何でって…、普通言うでしょう。

松下 普通って、何ですか。

松下、畳んだ作業着を衣装ケースの上に置く。

まるでそこが定位置のように。

妻 それは、(飲み込んで)…うちにはうちの事情がありますんで。

松下 事情って。

妻 あなたにお話しする必要ないかと。

松下 そうですね。

松下、くしゃくしゃの掛け布団からはみ出た作業着を手にとって、

ゆっくりと引っぱり出す。ズボン。

そしてまた畳む。

妻 松下さん、

松下 はい。

妻 あなたのご家族は来られたんですか？ 何度も。

松下 家族いません。私独身なんです。

妻 でもお腹。

松下 あなたにお話しする必要ないかと。

妻、松下の手つきを見ている。凍りついたように。

松下、畳んだズボンを衣装ケースの上の作業ジャンパーの下に、

忍ばせるように置く。

ゴミの山の中に、内田が入ってくる。ライフマートのコンビニ袋を下げて。

松下 (少し笑って) お茶、飲まないんですか。せっかくくれたのに。

内田、床に座る。テレビをつける。

試験電波発射中のテロップとカラーバーの画面と発射音。

妻 出て行ってください。

松下 出て行きますよ。息苦しいです。なんか、あなたといると。

内田、袋からコンビニケーキを取り出す。もそもそと。

妻、震える手で湯呑を持つ。

松下 内田さんもきつと息苦しかったんじゃないや、

妻、湯呑のお茶を松下に。

松下、その手を制す。

内田、コンビニケーキ(苺と生チョコペアケーキ。三角の2個入り)の

宝島

パックを開けながら、それらを見ている。深夜テレビを見るかのように、ぼさーっと。

妻と松下、湯呑を掴み合ったまま、

松下 お茶、飲んでくださいよ。汚くないですから。

妻 いらないます。

松下 私子供の頃、汚いとか菌とか呼ばれてました。

給食の牛乳配るの禁止されてました。菌がうつるからって。

松下菌、エンガチョ、バリアー。

ねえ、飲んでくださいよお茶。出されたものは飲みなさいよ、ほら飲みなさい

って！（湯呑を妻の口に押し付けようと、のしかかかっていく）

無理！（制しながら崩れ落ちる）

妻、知らん他人が触れたもん一番無理！ 汚いッ！

胞子がッ、大量の胞子が飛んで取り憑く！

松下 飲め飲め飲めーっ！

ついには妻の顔にお茶が流される。湯呑を掴み合ったまま。

掃き出し窓のすぐ外を制服姿の地味な女子高生が歩く。

ふらりと中を覗く。

妻と松下、ハッと女子高生を見る。

女子高生、来た方へ逃げるように去る。

内田、テレビを消す。

妻と松下、サッと離れる。何事もなかったように。

妻 ごめんなさい、今のも私の妄想です。（松下に。顔から茶の雫を垂らしながら）

松下 いいえ、私の妄想です。（妻に）

ブツンと切れるようにすぐ次。

○松下と内田

夜。

机代わりの段ボール。コンビニケーキ。内田が座っている。

松下、盆を持って立っている。お腹は大きくない。

湯呑を段ボールの上に置く。2個。

内田 お茶、ありがとう。頼んでごめんなさい。

僕の部屋、お茶つ葉もポットもなくて。

松下 ……いえ。

内田 どうぞ、ま、座ってください。（手で指す。段ボール机の内田の隣の辺）

松下 ……。

松下、部屋のゴミを眺めながら、座る。

内田 松下さん、チョコと苺どっち好き？

松下 ……。

内田 どっち？

松下 ……苺。

内田 良かった。僕チョコ。

宝島

内田 あ、しまった、フォークもらうん忘れた。
チョコだけ取ろうとして、

松下 私、(立ちかけて)

内田 いいよ。手で。(チョコケーキだけそっと手で取りながら)

松下 いいやろ？ 松下さん、手でも。
…。(うなづいて座る)

内田 内田、手でチョコケーキを持ち上げて、パックの蓋に置く。
莓ケーキが残ったトレイを松下の前へ滑らせる。ゆっくりと。

内田 はい。

松下 どうも…。

内田 (湯呑を持って) 持って持って。
…。(持つ)

松下 松下さん、誕生日おめでとーございます。(乾杯しかける)

内田 松下、乾杯せず、湯呑を手にしたまま、

松下 内田さん、何でこんなことするんですか。
や、別に。一人やから。
一人ですけど。

内田 ケーキ、二個入りやし、困るやん。誰かいないと。
誰か。

松下 食べましょう。

内田 ライフマートのんやけど。
ライフマート好きです、私。
僕も好きです。毎日行ってる。
はい、乾杯。

松下 内田、松下の湯呑に勝手に小さく乾杯して、飲む。
…。

松下 松下も飲む。

内田 内田、手でチョコケーキを手で掴んで食べる。
…。

松下 松下も手で掴んで食べる。
内田さん。(食べながら)

内田 はい。

松下 私、来年も誕生日来ますかね？

内田 …へ、何急に、松下さん。

松下 私たち、いつまでここにいますかね？

内田 いつまでやるな。次の辞令が出る時までやな。
来年とか再来年とかもここにいて、私たち、誕生日、ちゃんと普通に来るんですかね？

内田 …来るやろ。嫌でも来る。

宝島

松下 内田さん、私と居てください。
来年、ちゃんとまた誕生日がきたら。その日は私と居てください。
内田 松下さん…、

短い間。

内田 莓ちようだい。(手で掴む)

松下 嫌です！(手で制す)

内田 味見。(さらに掴む)

松下 嫌！

じゃチョコください。(手で掴む)

内田 莓。(口で齧る)

松下 チョコ。(口で齧る)

内田 莓。

松下 チョコ。

内田 莓！

松下 チョコ！

内田 莓！

松下 チョコ！

などへらへらと、ぐちやぐちやと、手や顔を汚しながら、

内田と松下、掴み合って食べ合って流されるようにもつれ合う。

妻、部屋に戻って、二人を見る。

松下と内田、サツと離れる。何事もなかったかのように。

内田、コンビニケーキのゴミを床に捨てる。

松下、ハンガーから防寒着を引き剥がす。

プツンと切れるように次。

○妻と守

戸口に男(守)が立っている。凍えた息を吐きながら。

守、小ぎれいなスーツにビジネスコート、ビジネスバッグ。

頭や肩に雪。

嘘、何でえ。

来たよ。

来られへんって言ってたやん。

やっぱ心配でたまんなくて。会議終わって全力で飛行機飛び乗った。

何で！？ 言ったやん、まず私一人で片付けるって！

だから一人で言うなって！

なんか2人駆け寄るように抱き合う。

俺がいるから。

守くん。

あさ子さん。俺が守るから。

雪。冷たい。

平気だよ。

宝島

妻 困る、今いるとマズいよ、会社の人の手前。
守 言えばいい、ちゃんとはっきり言えばいいよ。
妻 だって順番に片付けようって。
守 順番だろ、これは。もう今や。

守、離れる。
雪を払い、コートを脱いで床へ。

見つけたの？

妻 ううん、(首をふる)(すぐさまコートを拾ってハンガーにかけながら)

守 書き置きとかは？

妻 探せてない。

守 あれは？ 見つけた？

妻 探せてない。ずっと会社の人がいってはったから。

守 今今！ 探そ探そ！

守、辺りを探る。

妻、戸口から駆け出る。

守 どこ行くの。

妻(声) 鍵、内鍵しめとく。

内鍵のしまる音。

妻、駆け戻る。

守 2時間しかいられないんだ俺。

妻 16時20分の列車に乗って発たないと、帰りの飛行機、最終便に間に合わない。

守 私もそれで帰る！ 一緒に。

妻 うん、早く探し出して帰ろう！ 2人で。

守、探す。

妻、ただそれを見ている。

守 何見てんの、探して。

妻 無理、触れない。

守 もう、困ったな。

守、探す。

妻、ただ守が探すのを見ている。

掃き出し窓の外を旅の女と男が通る。女の後を男が辿るように。

さつき行った方から戻って。ふらりとした足取りで。

妻だけがそれを見ている。

妻 パツと見えるところは一応見てたつもりなんやけど。

守 どっかにしまい込んであるかも。

妻 でも、持っていないなかった可能性もあるよね？

守 ここで見つからなかったらそういうことだろ。

妻 くまなく探そ。

守、衣装ケースや段ボールの中を探す。

守、ゴミの山をあさり始める。

宝島

守 こん中に埋もれてるかも。
妻 捨てたってこと？
守 紛れてるとか。だつてこれだけ散らかつてるときさ。

妻 守、たくさんのゴミを掘り返して探す。
妻 わぁ！ ちよつともう。

守 (探しながら)ゴミ袋ないかな？
妻 ない！

守 でもどっかに、
妻 ないって！！

守 何怒ってんの？！

守、掃き出し窓を開ける。

強風。雪が降りこむ。

遠く波が砕ける音。

妻 何するん！？

守、あさったゴミを窓の外へ出していく。

守 見終わったゴミ外へ片付けとく。

妻 それ片付けたことになれへんし。

守 臨時措置としてだよ。

妻 まずいって、そこ人通るし。

守 こんなとこ誰も通んないって。

妻 旅行者が通るねんって！

守 今こんな雪中旅行者来るかよ！

妻 寒いっ！ 雪がゴミに積もるし！

守 いいよどうせゴミなんだし！（どんどんゴミをあさって出していく）

妻 ありえへん！ 雑すぎるッ！

守 応急的に捨てとくだけだよ。ねホント何怒ってんの？！

妻 怒ってない。

守 怒ってるだろ。

妻 怒ってない、

守 怒ってる、

妻 怒ってない！

なんかもまた2人抱き合っている。

窓の外、さっきの女子高生がちらりと覗く。

2人は気付いてない。

守 ね、ね、あさ子さん、とりあえずこの部屋片付けて。あれを探すのが先決だろ。

妻 うん、うん、守くん、わかっている。

守 ね、やっぱりあれのせいかな、あの人。

妻 だろう、少なからずは。

守 よねえ。うーん。

妻 やっぱ気にするんだ、そういうこと。

宝島

守 妻
さすがに。
複雑だな。

女子高生、逃げ去る。

妻
ね、ね、もし死んでも、あれに既に名前書いて印鑑押してあったら、出せるんかしら？

守 妻
むしろ死んでたら、別の手続き踏んでシンプルに結婚終了できるだろ。
じゃじゃ、もしも書いてなかった場合どうなる？

守 妻
最悪名前書いてないまんま、蒸発したまんま、生死不明のまんまやったら？
えー、どうなるんだろ。

守 妻
蒸発したまま何カ月か何年か待ってから裁判だったように思うけど。わかんない。
そんなん困る！ 待ってる間に、（お腹を触って）：生まれてきてしまう。

守 妻
運命の別れ際だな。名前書いてあるか、書いてないか。

妻
探そう！

守 妻
探そう、

妻
探そう、

守 妻
探そう！

妻
探す！

守、床に這いつくばってゴミを探す。

妻、手を下さずにそこらのゴミを見て探しているだけ。

守、探してはゴミを外へ出し、また探す。

暫く。

妻
きゃあー。 （口を押さえて）

守
どしたっ。

妻
これ、これーっ。

妻、震える手で指す。

小型の段ボール箱に隠されていた、たくさんの丸まったティッシュ。散乱。

守
ティッシュ。

妻
使用済。

守 妻
使用済燃料か。

妻
最低っっ！！

守 妻
しかも大量に貯蔵してある。

妻
信じられへん。

守 妻
使用用途は誰用？ 本人？ 他人？

妻
うえ、（空吐き）

守 妻
いいから早く、処分して！

妻
さすがに廃棄困難だよ！

守 妻
即刻！ お願い！

妻
はい処分処分！

守、段ボールでブルドーザーのように丸ティッシュをザクザクと箱の中

宝島

に戻す。

守、箱ごと外へ捨てる。

妻、その間にもあちこち見ているだけ。

掛け布団をとでも汚そうに、ちよつとつまんでめくってみる。

いやあー！。 (口を押さえて戸口へ逃げながら)

もう何っ。

出た、出たーっ。

妻、激しく震える手で指す。

敷布団の上に丸まったティッシュがたくさん。赤茶褐色の。

またティッシュ！

ね、ね、血かな、これって。

うん、血だよな、これって。

どっから出た血？

誰の血、本人？ 他人？

うえ、(空吐き)

気持ち悪い、処分して！

下手に触らない方がいい、もし犯罪か何かだったら。

犯罪！？

被害者？ 加害者？ どっちだろ。

妻、窓へ駆け寄って、

うえ、(空吐き)

うえ、うえ、

掃き出し窓から身体をかがめて吐く。

見なかったことにしよう。

守、パツと布団を掛け戻して、血のティッシュを隠す。

守、駆け寄って、かがんだ妻を背後から抱き、

ね、ないものとして、

知らなかったことにして！

うえー！

これも私の妄想です。(吐きながら守に)

いいえ俺の妄想です。(妻に)

妻と守、サツと離れる。

あ…、あれ。

守、妻が吐いた付近のゴミの中を指さす。

何。

あの紙。

あった？！

違う、レシート。

何か書いてある、小さく。手書きで。

守、拾う。

宝島

妻 レシート。(裏から見て) ライフマーケット。
守 (表を見て) 地図。
妻 日本地図。
守 何この線。
妻 なんなんやろ。
守 日本全土に線入ってる。いっぱい。
守 窓と逆側、玄関の外、車が停車する音。
守・妻 ……!
妻 ……誰。(以降すごく小声)
守 ……どうする。
妻、戸口へ駆け出る。
守 おい、
守 え、
妻、守の靴を手に駆け戻って、守に渡す。
守 え、
妻、壁の守のコートを引き剥がし、床のビジネスバッグを取って、守に。
守 え、え、
外、車のドアの閉まる音。
妻 出て、(窓の外を指し)
守 大丈夫だよ、内鍵閉めただろ。(窓を閉めようとして)
妻 玄関、鈴のついた鍵が出される音。
守 出て。(押し出す)
妻 でも雪が、
守 開けられる鍵の音と鈴の音。
妻 出て!(窓を半分閉めて)
守 凍死する!
妻、なんか守にキスして、
妻 守って!(窓を全部閉める)
妻 玄関ドアが開く音。
守、掃き出し窓の外のゴミの中に閉め出される。
妻、薄カーテンを引く。
戸口に女(食堂の女)が入ってくる。両手鍋と合鍵を手に。
食堂の女、白エプロンの上に防寒着。だが、脚は生めかしく出ている。
食堂の女 あら…、
プツンと切れるようにすぐ次。
○ワンダーフォーゲル部2
うす暗い。
熊よけの鈴の音。
積雪の中を歩く足取り。
3人の息 ……ハア、
……ハア、

宝島

…ハア、
…ハア、
…ハア、
…ハア、

広岡 高川くん、どこまで歩くんかのう？

高川 もうすぐやき、広岡くん。(肩を押さえながら)

広岡 福長くん、あれから何日かのう？

高川・福長 も…、もうすぐたい、広岡くん。(脚を押さえながら)

広岡 高川くん、いい加減そろそろこの辺でビバークしようやあ。

高川 いや広岡くん、歩けるうち歩いて避難小屋を探そう。

広岡 おかしいじやろ、僕たちずつと歩きよーんのに、避難小屋なんかねえがあ。

どこにも存在せんじゃねえん。

高川 広岡くん、僕は地図を覚えちよる、避難小屋はこの森を抜けたところに絶対、

広岡 見渡してみい、森なんかねえがあ、おかしいがあ、

高川 そりや雪が降りゆうき、森は埋もれちよろう。

広岡 白地図ん中を歩きよーるみてーじや。僕ら。

高川 白地図か。

広岡 何ーんにもねえ。等高線も地形陰影もねえ、何も存在せん、

行けども行けども白い白いだらだらと続く、

福長 広岡くん、ホワイトアウトたい…。

広岡、足を止める。

福長 …僕ら、ホワイトアウトしとるとよ。

広岡 違う、無の世界を歩きよーるんよ、僕ら。白地図の。

高川と福長、足を止める。

広岡 言うてみいや、今ここは何山脈、何連峰、何山^{さん}じゃ？

間。

広岡 沈みかけたつきり、日はいつんなつても暮れん。

高川と福長、見上げる。

広岡 何の音もねえ。

福長 広岡くん？

高川・福長 広岡くん広岡くん広岡くん広岡くん！

福長、ザツクのポケットからチョコを出して、

福長 ほれ、チョコば食べんね。

広岡、その手を掴んで、

広岡 いらん！ チョコを食べにやいけんのんは高川くんじゃがあ！

広岡、福長の手を持って高川の口にチョコをねじ込む。

高川、咀嚼して、

高川 ああ、こじやんと甘い！

福長 やらう、甘かろうもん。

高川 当たり前ちや！ どがなときもチョコは甘^{あめ}えき！

宝島

広岡・福長 高川くん高川くん高川くん高川くん！
広岡と福長、高川の頬を叩きまくる。

高川 し！

…音だ。

広岡・福長 …音？

高川 ずっとあっち。

雪を踏みゆう音。

音などない。

高川 声だ。

3人、耳をすます。

高川 呼びゆう。

高川、立ち上がる。

高川 リーダーなが！

高川、ストックを振って、

高川 おーい！

福長 …幻聴たい。

高川 何ゆうてるちや、リーダーやいか。

…ほら！ おーいって。こだましちゆう！

広岡・福長 高川くん！

高川 おんしらも呼びやー！

リーダーー！

おーい！ おーい！（駆け出す）

広岡 行っちゃいけん。（タックルして抱き止める）

高川を抱き止めた広岡、ハツとして、

広岡 声じゃ…。

高川 そうろう。

広岡 呼びよーる！

福長 何ね！？ 広岡くんまで。

広岡 この声はリーダーじゃねえ、山の神じゃあ！

3人の女（声） おーい。 （遠いささやき）

高川 山の神ながか！

福長 2人して何ば言いよつとや、山ん神なんかおらんとよ！

3人の女 おーい。 （ささやき）

3人の女（食堂の女、女子高生、コンビニの女）が歩いてきて、立つ。

広岡 見いーや、遠く、あの峰。

福長 ましゃか！

3人の女、小さく手を振る。小さく笑って。

広岡・高川 おーい！ おーい！ （ストックを振って）

福長 山ん神はおなごやなかとよ！

高川 山ガールちや！！！！

宝島

広岡・高川 福長くん！

福長 あいの山ガールつちいうと？！

3人の女 ヤッホー！ (ささやき)

広岡・高川 ヤッホー！

3人の女、遠い峰でなんか踊っている。くねくねと。楽しげに。

広岡 登ろう！

高川 着いてきとおせ。

広岡・高川 福長くん！

3人の男、歩く。

歩きながら広岡、ストックを挙げて、

広岡 ワンゲル歌集1、第27番ヨイ。(掛け声)

高川・福長 ヤッサー。(ストックを挙げて)

「雪山讃歌」

3人の男、山の神が踊る峰へと歩いて歌う。(音楽なし)

高川は肩を押さえ、福長は脚を押さえながら。

吹雪も雪崩も怖くないという趣旨の歌詞の途中で

ブツンと切れるようにすぐ次。

○妻と食堂の女

食堂の女、両手鍋を持ったまま、

食堂の女 んだげど私、私、ごめんなさい。死んでお詫びします。

妻 は、死んで？

食堂の女 本当よ。死ぬことなんて怖くないの、私。

妻 そんなん、死なれてもこっちが困るんで。

食堂の女 困るってわがってたの、わがってて言ったんです。

妻 は！？ 何それ。

食堂の女 内田さんのことも。困るってわがってたんだけど、私、抛り所だったんです。

いつの間にか。許して。

食堂の女、合鍵を妻に渡す。

妻 許してって言われても私…、

妻、汚いものみたいに合鍵を持って余しながら、

食堂の女 許せねですよね、ごめんなさい、本当私、死ぬしかねんです

妻 えらい軽く死ぬ死ぬ言わはるんやね。

食堂の女 決して軽い気持ちじゃねがったんです。本気だったの。

妻 本気って、

食堂の女 本気で私、奥さんのこと、死んだと思ってたんです。

妻 え、私…？！

死んだって、…あの人がそう言ったんですか。

食堂の女 いえ、ごめんなさい、私が勝手に、直感的に、内田さん奥さんを亡くした人だ

あーって思ったの。私と同類だあーって。

妻 同類…。

宝島

食堂の女 私、前に夫を亡くしたんです。
海にさらわれまして。

食堂の女、掃き出し窓へ。

妻 ……！

食堂の女、薄カーテンを少し開ける。

妻 ……あ、(小さく)

食堂の女、窓を開ける。

雪風が吹き込む。

一瞬、窓下のごみの山を見るが、海を見て、

食堂の女 あの海よ。

遠く波の碎ける音。

食堂の女

命日に、灯台さ行くその道で、内田さんと出会ったの。呼びとめられたの。内田さんにもわがったんでしょね、同類だあーって。

なしてでしょう、片割れを失った者には、特有の空気っつーか、穴が見えるんです。からだの半分さ穴。半身をもぎとられた穴よ。

内田さんにも見えたんですよね。

その穴さ自分の半身を隣合わせて、埋め合って、傷をなめ合ってたんです。

妻、合鍵を弄びながら、冷ややかに、

妻 はあ、そう。

食堂の女

んだげど、やっぱし、どうにもすき間があって、ぴたりと穴は埋まらねんです。うすら冷てえー風が漏れてぐる、たまんね、死にたくなる、くり返し。

食堂の女、窓を閉める。

妻

あの人も、同じやったんでしょか。…(嫌悪的に)死にたいとかいうて。

食堂の女

内田さんは！死にてえ私を呼びとめて、引きとめてくれました、何度も！

妻

じゃあの人どこですか…！？

食堂の女

わがんねです、私、ござさいると思って来たんだもの！

妻 ……そう。

妻、合鍵を食堂の女につき返す。

食堂の女

これはもう私は。(受け取らない)

食堂の女

どういうことですか。

妻 そういうことです。

妻、つき返すが、食堂の女、手を出さない。俯いて首を振るだけ。

妻、合鍵をゴミの山の中にとりと捨てる。

食堂の女

あ…。

妻 私が持っても、使い道ないし、あの人に返しようもないんで。

妻、服の裾で汚そうに手を拭きながら、

妻

あの、お詫びとかほんともう私、全然いらんんですけど。

なんか、なんでしよう、そない不幸を振りかざして死にたい死にたい言うのって、ずるいやないですか。

死にたい言うてる人に死んでお詫びされても、ありがたみないし。

宝島

やりたいことやっただけよね。

ほな生きれば！？って逆に思ってたまう。

食堂の女、海を見て、

食堂の女
…そうよねえ。

食堂の女、薄カーテンをしめる。

両手鍋を段ボール机の上に置く。

食堂の女
(少し笑って) これ、置いていきます。

妻
(少し笑って) 何それ。

食堂の女
おでん。

蓋を開ける。1人分には多すぎる量が入っている。

ゴミの山の中に、内田が入ってくる。ライフマートのコンビニ袋を下げて。

食堂の女、鍋の中を見ながら、

食堂の女
私、いずみ食堂のいずみという者もんです。

妻
…食堂の、…ああ。

内田、床に座る。テレビをつける。

試験電波発射中のテロップとカラーバーの画面と発射音。

内田、袋から缶ビール(のどごし生)を取り出す。もそもそと。

食堂の女
こつから町へ行く道さ車でちよべつと降りたところ。

前は夫とふたりでやってました。波に流れ残ったちゃっこい店です。

んだげど、もうみんなよそさいなぐなって、よそから来てた会社もさあーつと
いなぐなって、ここ何年、お客さんほとんど来ねがったの。

おでん、いつも余って困ってた。

内田さん、よぐ頼んでくださいました。何度も。たぐさん。

だげど、今日で閉店です。

食堂の女、おでんの蓋を閉める。

内田、缶ビールを開けて、飲む。

食堂の女、帰ると思いきや、防寒着を脱ぐ。

妊婦である。

妻
え…、

食堂の女、妻よりも少し小さいお腹。

食堂の女、お腹に触れるかのように、懐に手を入れる。

妻
あなたも…。

食堂の女、手を出すと、果物ナイフを握っている。

内田、缶ビールを飲みながらそれらを見ている。

深夜テレビを見るかのようにぼさーつと。

妻
え、え、

食堂の女、鞆を抜き、懐へ。

食堂の女
(以降とても小さく) 死にます。

妻
は、

食堂の女
本当よ。いつ死んだっていいって思ってきたんだがら。

宝島

妻 何でこんなところで。

食堂の女 海は恐ろしいがら。

また誰かに呼びとめられっと死ねねえがら！

妻、果物ナイフを振り上げて喉に、

妻 あー、

激しく窓が開く。守。

守 待てっつ！！

食堂の女 誰。

守 通りすがりの者です。（部屋に上がる）

食堂の女 とめねえで、死ぬの！

再び果物ナイフを振り上げる。

妻と守、駆け寄って食堂の女の腕を取る。

守・妻 駄目！！

妻 子供がっつ！！（女の腕をとったまま）

守 あさ子さん！！

食堂の女 死にてえーってさ中で宿った子だもの。

この子もやがて必ず死にてえって思うようになる、わがる！

妻 わかる？ 待っても待っても宿ってくれなかった子もいるのに！

食堂の女 離して！

守 ナイフを離せ！（女を羽交い絞めにするが）

食堂の女 嫌！！死ぬんだ！

食堂の女、半狂乱で振りほどく。

で、さくつと妻の片腹を刺す。

妻 え？

食堂の女 （少し笑って）あら、奥さん、なしてでしょう、不思議ですね。（ナイフを抜く）

内田さんと違って、奥さんの半身に穴は見えねです。（また刺す）空いてねえ。

あんただけ無傷に見える！（また刺す）

妻 ええー？

守 うおおー！！

なんか叫んで守、食堂の女に食らいつく。

妻 守くん！

守 守るから！

妻 おそーい……！

妻、片腹を押さえて崩れ落ちる。

守、食堂の女を布団の上に押さえ込み、ナイフの手をとり押さえる。

食堂の女 離して！ 離して！ 離してようー！！

のしかかられて暴れながら、食堂の女、守の頭を掴んでキスする。

間。

そして、恨めしげにちらりと妻を見る。

妻 何でえー？！（片腹を押さえて）

宝島

土井 おいつ、何だお前っ!! (守に)

掃き出し窓から土井が叫ぶ。指定ゴミ袋のパックを手にしている。

内田、テレビを消す。

妻、立ち上がって、片腹を押さえていた手をパツと放す。

妻 これも私の妄想です。(食堂の女に)

守と食堂の女、サツと離れる。何事もなかったように。

守 いいえ、俺の。(食堂の女に)

食堂の女 いいえ、私の妄想です。(妻に)

食堂の女、立ち上がり、懐から鞆を出して果物ナイフに蓋をする。

プツンと切れるように次。

○食堂の女と内田

夜。

食堂の女と内田、鍋を前に隣合って座っている。

内田、缶ビールを飲んでる。

食堂の女、鍋の蓋を開ける。お腹は大きくない。

割り箸を手にして、内田の顔を見ている。

食堂の女 だいこん、たまご、こんにゃく、じゃがいも、ちくわ、ぎゅうすじ、あつあげ、

きんちやく、しらたぎ、はんぺん、(内田の顔を見る)

内田 だいこん、たまご、きんちやく、しらたぎ。

食堂の女 お皿、

内田 ないです。

食堂の女、少し笑って、鍋の蓋に取っのせる。

食堂の女 だいこん、たまご、きんちやく、しらたぎ。はんぺん。

内田 はんぺん?

食堂の女 おまけです。4つじゃ数が悪いが。癖なんです、私。

食堂の女、鍋の蓋をゆっくりと滑らせて内田に差し出して、自分の持っ

ていた割箸の向きを返して渡す。美しい動作。

内田、箸を受け取って、

内田 いただきます。

食べる。

食堂の女、食べるのをただ見ている。

間。

内田 食べないんですか。

食堂の女 もう飽ぎました。自分で作ったもん食べるのは。

内田 そうですか。

内田、黙々と食べる。

暫く。

食堂の女 早えですね、食べるの。

内田 ですかね?

食堂の女 早えですよ。あつという間に終わるんだなって思っていました。店でも、いつも。

宝島

内田　　そうですか。癖かな。何も考える間がないように、機械的に食べてました。いつも。

内田、食べ続ける。

食堂の女、内田が飲んでいたビールを手に取り、一口飲む。

食堂の女　内田さん。

内田　　はい。

食堂の女　食べ終わったら、私を殺してください。(淡々と)

食堂の女、懐から果物ナイフを出して、鞘を抜き、段ボール机の上に置く。

内田　　へ。

食堂の女、座ったまま上着を一枚脱ぐ。

内田　　いずみさん。

食堂の女　左胸を刺して。

もう一枚脱ぐ。スリッパ姿になる。

食堂の女　私を殺して。

スリッパも脱ごうとする食堂の女を内田抱きとめる。

何の激しさもなく。流されて覆うように。

内田　　やめてください。

内田さん、こないだ灯台さ行く私を呼びとめて、助けたつもりでいるんでしょう。

内田　　そんな、別に僕は。

食堂の女　助げるなら、私を殺してくださいよ！

食堂の女、内田の手を掴んで、キャミソールの中の左の胸元へ。

内田　　いずみさん。

食堂の女　ほら、ないのよ。本当に私、半身がないの。

ね、こっちは山。で、稜線を下って隣は崖。醜い崖。

最初はごごも山だったんだけど、前になぎ倒されて、切除されました。

そうして、崖から先は海になったの。暗い平てえ冷てえ海よ。

海の底にはその昔、醜い怪物がいたんです。

今は、怪物は、限界まで放射線を浴びて、やつづけられて眠ってる。

ううん、眠ったふりしてる。いつ目を覚まそうがと息を殺してる。

その怪物の腹の下さ、海にさらわれた夫がいる！

内田さん、私を助げるなら、怪物を殺して！

食堂の女、内田の手を掴んで胸から出して、果物ナイフへ。

内田、食堂の女の左胸に顔を埋める。

何の激しさもなく。流れでそうしたかのように。

食堂の女、凝固する。

されるがままになっている。

食堂の女　(淡々と) だいこん、たまご、こんにゃく、じゃがいも、ちくわ、ぎゅうすじ、あつあげ、きんちゃく、

内田　　何、

宝島

食堂の女 呪文よ。辛いときは、関係ねえこと唱えて、空をとぶの。

内田、食堂の女の傷をなめる。何度も。何の激しさもなく。

食堂の女・内田 だいこん、たまご、きんちやく、しらたぎ、はんぺん、

妻、部屋に戻って、2人を見る。

食堂の女と内田、サツと離れる。何事もなかったかのように。

食堂の女、果物ナイフに鞘をはめて懐に戻し、鍋の蓋を閉める。

内田、ビール缶を潰して床に捨てる。

プツンと切れるようにすぐ次。

〇妻と守と土井 1

遠く波の砕ける音。

掃き出し窓の外、土井が立っている。ゴミ袋のバックを手に。

窓を上がった所、守が震えながら立っている。ビジネスバッグを抱えて。

2人、頭や肩にたくさん雪。特に守。

妻、立ち尽くしている。疲弊して。

土井、雪をはたきながら、

土井 ごめんなきいつ、監視塔から戻る道から、ここを何度もうろついてらっしゃるのが見えたもんで、私につきり不審者かと。(部屋に上がる)まさか弟さんとは。

土井、脱いだ靴を手に、窓を閉めながら、

守 ええ、はい、(頭を下げる)：義姉さんが、あの女性とだいぶ話し込んでる感じだったんで、ちよつと入る機会失ってました。(震えながら)

妻 あ、そうなんや、ごめんなきい、

守 いいですいいです、全然。

土井 ほんと似てないですね、内田さんと全く。

守 あそれよく言われます。

土井 言葉も違いますし。

守 あ言葉は私、大学から東京の方へ出まして、向こうでの勤務が長かったもんで。

土井 ああ、なるほど。

守 つい去年、関西転勤で戻ったばかりなんですよ。

土井 そうですか。ま、弟さん、(奥へ入って手を上げて)暖房の風こつちよく来ますんで、ここどうぞ、座られたら。

守 ああ、どうも、(入って座りながら)ほんとだあったかい。

守 はあー、生き返ります。

土井 ほんつとこの雪どうしたんでしyouね、初雪でここまで激しく降るなんて。

守 もう外結構積もっちゃってますね。

土井 ねえ、部屋もだいぶ暗いし。まだ夕方でもないのに。

土井、戸口へ行き、電灯を付けて、

土井 あ、奥さんこれ、(ゴミ袋バックを渡す)私の部屋に1バック予備があったんで。

妻 え、ああゴミ袋、すみません…、

土井 えらいたくさん外へ出されたんですね、ゴミ。

妻 や、違うんです、あれは応急的に。

宝島

土井 応急的？

妻 いえ、すいません、片付けます。(パックからごみ袋を1枚出して)

守 あ義姉さん、手伝います俺。

土井 や、ま、ゴミ後でいいですよ。

ちよ失礼、私、靴を。

土井、戸口から去る。

妻と守、こそこそと。

妻 もうっ。

守 これ、これっ。

守、ポケットからレシートを出して、妻につき出す。

妻 今いって。(つき返す)

守 この線、この線っ。(地図の線を指す)

妻 え、何。

土井、玄関に靴を置いて戻る。

妻、レシートをポケットへ。

妻と守、土井をふり返る。

土井 何ですか。

妻・守 あいえ。

土井 今何か持ってませんでした？

妻 いえ、ゴミ袋を渡そうと。

土井 ああ、そうですか。

妻 はい。(守にごみ袋を渡す)

守 ああはい。

守、受け取って窓を開けようとするが、外をさっきの旅の女がまた
灯台の方へ歩く。ふらりとした足取りで。

3人、旅の女が通りすぎるのを見る。

土井 あのー、弟さんと奥さん。

妻・守 はい？

土井 現実的な話、どうされます？

妻 現実？

土井 捜索願のこと、調べてみたんですが、配偶者か親族、どちらからでも出せるみたいですけど。

妻 …ああ、(守の顔を見る)

守 …あ、はあー、捜索願かー。

土井 厳密には家出人捜索願だそうで、一般家出人と特別家出人に分けられるそうです。

守 特別？

土井 子供や痴呆の老人とか、日頃から自殺をほめかした人とか、何らか事件や事故に関わってそうな場合です。

守 ああ、なるほど、

土井 それ以外大体は一般家出人だそうです、普通の成人の場合。まあ捜索願を出した

宝島

守 ところで、別に警察が率先して捜してくるわけではないですよ。え、そうなんですか、届け出るイコール警察が捜索開始ってわけじゃないんですね？

土井 ええ、ただ家出人リストに加えられるだけで。ほうほう。

土井 やはり捜すのは自力しかないみたいですよ。最悪探偵とか雇ったりして。そうですか、なるほど、自力か。

土井 どうなんでしょう、内田さんの場合。

守 現時点その…自殺や、…事件や事故の、決定的な手掛かりとか、…見当たりました…？

土井 あー、決定的かはー。(妻を見て)

守 何か？

妻 や、いえ、何も。

守 あーいや何も、特にないですけど。

土井 じゃ一般家出人ってことですよ。

守 ええええ、一般、一般ですね。

土井 どうします？

守 もし届け出るなら、家出人が失踪した時の住所の管轄、つまりこの町の警察署へ行く必要があります。

妻 家出人の写真と、あと奥さんか弟さんの身分証と印鑑があれば、出せますけどどうされます？ 今から行きます？ 車出しますよ。

守 妻、土井の話中考え込んでいる。

妻 守、妻の顔を伺って、

守 どうします？ 義姉さん？

妻 …ああ、うーん。

守 俺、印鑑も身分証も持ってきてないし。

妻 …私も。

土井 免許証でいいかと。

守 あー、免許持ってなくて、残念ながら。

妻 …私も。

土井 え、でも奥さんさつきゴミ袋買いに、車で行きますって。

妻 え、や、あれは！？ 違うんです、たった今、そういえば免許証家に置いてきたな…って気付いて。

土井 家に？ 免許証を？ …奥さん？ (怪訝)

妻 違うんです、違うんです、もう本当、違うんよ…！

妻、ゴミ袋バックを胸に抱えて、

その場にしゃがみ込む。

守 義姉さん？！

土井 奥さん？ 大丈夫ですか？ もうなんか床座っちゃってますけど。

妻 もういいです、もう本当言うと私、疲れました…。

宝島

搜索願なんかどうーでもいい！ あの人がいなくてももう私正直関係ないです。

土井 は、関係ないはないでしょ、奥さん。

妻 関係なくなりたい。(ゴミ袋パックをもみ潰しながら)

守 義姉さん！？

妻 ほんまもうあの人…、なんなんやろ…、

妻、ゴミ袋パックを叩きつけて吐き捨てる。

妻 (小さく) しょーもない…！

掃き出し窓が叩かれる。

妻・守・土井 …？！

○女子高生と妻と守と土井

外のゴミの中に、一見地味な女子高生が立っている。

制服にたくさんの雪。

土井・守 …あ。(小さく)

妻 …何。(小さく)

女子高生、窓を開ける。

雪風が吹きこむ。

女子高生 あのっ。

遠く波の碎ける音。

女子高生、制服のお腹が大きい。手で抱えている。

妻 …え。

短い沈黙。

妻、女子高生のお腹を見る。

何かが入っているように見える。

女子高生、妻の視線に気付いて、

女子高生 フフっ。(ケラケラ笑う)

女子高生、制服の内ポケットから、

女子高生 あのっ。

これっ。

女子高生つぼいちゃちいビニールポーチのペンケース。鮮やかな色の。

パンパンに膨らんでいる。

女子高生 ウツチーに！

ペンケースを差し出す。

妻 …ウツチー？

誰？

女子高生 秋。春夏秋冬の秋。

妻 内田の何？

女子高生 何だろ、トモダチ。(ピース)

妻 トモダチ。

女子高生 ウツチーにこれっ、渡して！

妻 何それ。

宝島

女子高生 ウッチーがらもらったもの。大事なもの。

返すよ！

妻 返すって、私に言われても。

妻、受け取らない。

以降、女子高生シレっと笑って、

女子高生 アンタ、ウッチーの元嫁でしょ？（ペンケースで妻を指す）

妻 や、まだ元では、

土井 まだ？

妻 や、

女子高生 もめてんでしょ、なーんが。（ペンケースで円を書いて3人を指す）

妻 え、や、何であなたが？！

女子高生 見ちゃった、さっき、ちよペーっと。（ペンケースで守を指す）

守 は、何で俺？！

女子高生 ん？ まいいや、ハイこれっ！

掃き出し窓から部屋に身を乗り出して、ペンケースを持つ手を妻に差し伸ばす。

女子高生 返すから、ウッチーのこと、警察さ言わねえてください。

妻 お願いつ。（頭を下げる）

妻 ……中身何。

女子高生 んだから受け取って、開けて見れば？

受け取ろうとしない。

女子高生 取ってようーっ！ 返すからさあーっ！

女子高生、乗り出してペンケースの手を出したまま、

間。

女子高生 （小さく）ドイちゃん、ねね、ドイちゃん。（ペンケースで手招き）

土井 （小さく）…や私、

妻 お知り合い？

土井 いやいや、

女子高生 トモダチ。（ピース）

土井 別にトモダチじゃ、

女子高生 1回遊んだ。（ペンケースで指す）

土井 遊んでないですっ。

妻 遊んだ？

土井 いやいやいや、

女子高生 ドイちゃんがごさ来たてん時。秋まだ中2ん時。

土井 いやいや断りましたよ！

女子高生 そうだっけ？

土井 そうでしょう、私は内田さんとは違います！

女子高生 ん？

妻 どういう意味？

宝島

土井 あいや、それは、

女子高生 (ペンケースを振って) ん？ まいいや、いいよ、いいからドイちゃん、

(土井の方に乗り出してペンケースの手をのぼして) ドイちゃんに預げっがら。ウツチーに返しといて。

土井 いやいやいやいや、

女子高生 いぐよっ、パスっ！

女子高生、ペンケースを投げる。わけのわからないコントロール。

守の前に落ちる。

土井・守 …え。

女子高生 ん？ あれっ、フフっ、(ケラケラ笑って) まいいや、

んじゃ、あなた、お願いしましたがらっ！ (守に頭を下げて)

守 俺！？

女子高生、走り去ろうとする。お腹を抱えて。

妻 ちよっと！ (立ちあがって)

守 おいっ！

守、ペンケースをバトンのように拾って、窓の外へ駆け降りる。

守 おいおいおいおい。

女子高生を掴んで引き止める。

女子高生 何っ。(振り払う)

守 (ペンケースを女子高生の手突きつけて) ちゃんと説明して置いてけよ！

女子高生 偉そうに何っ。間男！

なっ、何だそれっ！？

いやいやいや！ (土井に)

妻 何あんた！

女子高生 さっきあんた話してるの聞いたがら。「あれのせいであの人」って。

守 あれっ。

土井 あれ？

妻 や、違う、あれとか。

守 いやいやいやいや！ 何だよこれっ！

(ペンケースを女子高生の手で投げるように押し付けて離れる)

女子高生 フフっ、フフっ。(ケラケラ笑って)

ゴミの山の中、内田が入ってくる。ライフマートのコンビニ袋を下げて。

女子高生、ペンケースを拾って開ける。

一万円札。数十枚。

内田、床に座る。テレビをつける。

試験電波発射中のテロップとカラーバーの画面と発射音。

妻 援交っ！

女子高生 違うっ！

…募金よ。

内田、袋からスナック菓子(なげわ)を取り出す。もそもそと。

宝島

女子高生、札束を掴んで、
ウツチーにもらったの。何度も。いっぱい。

やーさしんだあー、ウツチー。うれしがったんだあー、秋。
でも返す。やさしさ返すよ！

預がっもらえねなら、わがったよ、いいこと考えた！

女子高生、部屋の中に駆け上がる。片手は腹を抱えたまま。

内田、スナック菓子を食べながらそれらを見ている。

深夜テレビを見るかのようにぼさーつと。

女子高生、妻のポケットに札束をねじ込んで、

女子高生 寄付します！ 元嫁に！

妻 何っ！？

女子高生 募金よ。

妻、抵抗する。が、女子高生、力づくでねじ込む。

妻 触らんとってっ！

女子高生 不幸な人に、愛の手よ。

女子高生、ねじ込んで、窓の外へ駆け出ようとするが、

妻、ポケットから札を掴み出して、女子高生に投げつける。

妻 いらんわ！ 何よっ、何よっ、こんなもん！

バラバラと。何度かに分けて投げつける。

女子高生 フフフっ、(ケラケラ笑って)

ほらやっぱ不幸だよ、誰よりも不幸な人がいるよ。(ペンケースで妻を指して)

妻、指されたペンケースを掴み取る。

女子高生 フフっ、フフフっ、

女子高生、錯乱したかのように床の万札をかき集める。でも大事そうに。

妻、ペンケースを持つ手が震える。

女子高生、拾った万札を土井に押し付けて、

女子高生 ハイ、じゃあドイちゃん！

土井 いやいやいや、

女子高生 どうせ最終ドイちゃんのごさ帰ってぐる予定のもんでしょ？

土井 え、何でそれ！？

女子高生 フフっ！(ピース)

妻、ペンケースをゴミの中に投げ捨てて、服の裾で何度も手を拭きながら、

妻 これも私の妄想です。

守 いいえ、俺の。

土井 いいえ、私の。

女子高生 いいえ、これは私の妄想なんがじゃない！

(ペンケースを引たくるるように拾って)

妻 え、

女子高生 (ペンケースを内ポケットにしまいながら) これは、私の宝物でした。

(窓下に駆けおるる)

宝島

土井　これは、これは、何ですかね？

土井の手の中の札束に、あのレシート。

内田、テレビを消して、食べかけのスナック菓子の袋をゴミの山に捨てる。

妻　…あ。

妻、札を出したポケットを押さえる。

プツンと切れるように次。

○女子高生と内田

夕暮。

内田、掃き出し窓の前に座っている。

女子高生、窓下に立っている。制服のお腹は何かで膨らんだまま。

女子高生　危なぐなんかねえ。

内田　危ないから柵がはってあるんやし、

女子高生　平気。秋あの柵乗り越えんの慣れてっつがら。

内田　え、君よくあそこ登るの？

女子高生　まあ中学ん時がら。(ピース)

内田　危ないって、崖から落ちたら終わりですよ。

女子高生　平気。落ちねえっつてば。

内田　あんなとこで何するん？

女子高生　ん？ えつとねー、

捨てる。

制服のお腹に手を入れる。

女子高生　これっ。

りんごを1つ差し出す、

まだお腹はふくらんでいる。

女子高生　これを捨てに来ただけ。

内田　りんご。

女子高生　痛んでる、もう。

腐ったりんごよ。

崖から海さ投げるの。突端に立って、ポーンと下へ。気持ちいいーの。

内田　何でりんご。

女子高生　秋、売ってるんだあ。りんご。

内田　きみの家、りんご農家ですか？

女子高生　違う。家、豚舎。養豚。もう豚いねえけど一頭も。

りんご農家は幼馴染の男子ん家。学校の帰り道、もぎって通るの。黙って。

フフっ。

内田　黙って盗ったものを売ってるん？

女子高生　いいの。どうせあの子ん家もいっぺえー捨てんだがら。秋が売ってやんの。

りんご。1個1万円！

内田　高。

女子高生　まだ早摘みだから高えのよ。

宝島

内田 遠くから来た旅行者のおじさんに売るのが。手土産よ。わりがし売れるんだあ。ぼったくり商売ですね。

女子高生 やさしそうな人には1個3万円！ 憐れんで買ってくれる。売れ残って腐ったら海さ捨てるの。

女子高生 女子高生、窓から身を乗り出して、りんごを差し出す。

女子高生 買って。

おじさん。

間。

内田 ……おいくらですか。

女子高生 ……3万。

内田 ……。

間。

内田、敷布団の下に手を入れる。もそもそと、1万ずつ3回抜き取る。

女子高生 わあ！

手品みてえ！（ケラケラ笑う）

内田、3万差し出す。

女子高生、目をきらきら輝かせて、手を伸ばす。

部屋へ上がって、後手に窓を開める。

女子高生 ありがとう。

内田 ……。（その言葉にハッとす）

りんごと3万をひきかえる。

女子高生、内ポケットからペンケースを取り出して、3万円をしまう。

大事そうに。

内田 売ったお金、どうするん？

女子高生 ン？ ごごさ貯金する。（ペンケース）

高校出たら東京さ行くの。で、いい大学入るの。秋の夢。

で、いい会社入って、ごこの土地のできごとなんが何ーんも知らねえ都会のぼんぼん捕まえて、結婚して、子供産むの。（ペンケースを内ポケットにしまう。笑って）

布団の縁の内田、腐ったりんごをかじる。

女子高生、布団の上に立ち、制服のブレザーを脱ぐ。

で、ブラウスからまた一つ、腐ったりんごを取り出す。

平たいお腹が見える。

女子高生 崖から下さ落ちてぐときは、何ーの音も聞こえねえ。静かに、飲み込まれる。

（布団の上に落とす）

腐ったりんごは、海の怪物の大好物よ。

内田 怪物。

女子高生 あつと言う間に食べてしまう。跡形もなぐ。（またひとつお腹から取り出して）何度も、いぐつも、腐ったりんごを食べて、海の怪物はぶぐぶぐ大きくなっていぐ。（落とす）

宝島

女子高生、布団に座る。

女子高生

そして、いつしか、何年か後に、秋のお腹ん中がら、りんご太郎が産まれるの。(笑って、またひとつお腹から取り出して)りんご太郎はすぐすぐ育って、怪物退治に旅立つの。さあ敵討ちよ。東京がらたぐさんの山越えて、あの岬に立つんだ！(岬の方へりんごの手を上げて)

内田

りんご太郎。(笑って)

女子高生

フフフっ。私の自慢の息子よ。人々を救う、日本一のりんご太郎。強くて健康。ほっぺの赤えりー男の子！

女子高生、笑って、手の中のりんごをかじる。

内田と2人、布団の上で向かい合って、それぞれのりんごをかじっている。

妻、部屋に戻って、2人を見る。

内田と女子高生、サツと離れる。何ごともなかったように。

女子高生、布団の上のりんごをかき集めて、ブレザーでくるむ。

内田、食べていたりんごをゴミの山に捨てる。

プツンと切れるようにすぐ次。

○妻と守と土井2

土井の手にレシート。

土井

何ですかね。これは。

守

これは、

土井

奥さん、あなたのポケットから、

妻

や、これはただゴミん中に落ちてたから、

土井

何かなこの線、たくさん、手書きの。

守

この線俺、わかりました…！

土井

おー、さすが弟さん。

守

学生の時、地理で覚えませんでした？

土井

え、地理？

守

ほら、西から、(レシートを指して)九州山地、筑紫山地、四国山地、讃岐山脈、

土井

ああ、

守・土井

中国山地、紀伊山脈、赤石木曾飛驒山脈、関東山地、越後山脈、阿武隈高地、

北上奥羽出羽山地、日高夕張、石狩北見。

守・土井

おおー。

守

山脈。

土井

日本の山脈。

守

でしょ。

土井

やっぱり山ですかね、内田さん。

守

えやっぱりって？

土井

えだって大学の部活の、ワンダーフォーゲル、

守

あー、そうそう、そうだった、ワンゲル。

土井

今こんな中、呑気に山登ってんですかね、内田さん。

宝島

守 え、こん中のどこですかね、印しるしとかないですよね。何山脈なにかさんの何山？
土井 あ、ここ。(レシートの表の印字を指す)
守 え？(裏返す)
土井 (指して) Climb every mountain.
守 エブリー！？
土井 全て？
守 何で英語？
土井 さあ。
守 全ての山登ってんですか？ こん中の？ ありえない。
土井 あ、日付、レシートの日付いつです！？
守 おお日付。(見て) …9月17日。
土井 おお、約ひと月前。これはかなりの手がかりじゃないですか？
守 ですかね。
妻 何の手がかりになるんですか！ こんなレシート。(レシートを取って) ただの落書きかもしれんのに。
守 ですよ。
土井 でも何か思なったから内田さんこれ書いたんでしょ。
守 ですね。
妻 やからといってこれ書いたから、今山行っただとは限らんやん！
守 全く繋がらんやん！
土井 ですよ。
妻 全然わからんやん。あの人は何考えてたかなんかわからんやん！
土井 こんなもん、単なるこのゴミの山ん中の、残骸ざんがいのひとつかもしれんのに。
土井 残骸、
外をさっきの旅の男が歩く。また灯台の方へ。ふらりとした足取りで。
妻 3人、旅の男が通りすぎるのを見る。
妻、レシートの山脈を見つめて、
妻 もうほんと、放棄します。
守 土井さん私、あの人を捜すの、放棄します。(レシートを丸める)
守 あさ子さん！(その手を掴む)
妻 あ、…守くん。
守 (手をはなして) もういいって全然別に、バレたって。
妻 いいけど別に。
土井 やもう早い時点でバレバレでしたけど。
守 ですよね！？
土井 ご主人を捜す気ないのも、奥さん。
妻 ……そう。そやね。
土井 奥さん、あなたご主人のことよりゴミのことばかり気にしてる。
妻 だってゴミやから。(手の中のレシートを見つめて)

宝島

土井 …は。何が？ 誰が？
妻 …うちら。(レシートを握った手をお腹へ)

妻、レシートをゴミの山にポトリと捨てる。

土井 遺棄ですよ。奥さん、これは放棄じゃなくて遺棄です。

妻 いき？ (その手で口を覆って) 何い、死体でもないのに。

守 遺棄、

土井 (レシートを拾いながら) 見離して見限って見棄てる、遺棄だ。

(妻にレシートを突きつける)

妻 言うたでしょ、私不潔なん駄目なんです。

いっぺん棄てられたものは、もうゴミよ。

汚い。

妻、口を覆ったまま。

土井、包帯の手でレシートを強く握りつぶして、

土井 奥さん、あなたこそ汚い。

土井、妻にレシートを投げつける。が、小さすぎて。

守 ちよつ、

妻 フフフフ。

そやね。嫌やわあ。

小さく笑った。

プツンと切れるようにすぐ次。

○ワンダーフォーゲル部 3

うす暗い。

声1 …ううー。 (小さく)

声2 …ううー。 (小さく)

雪風。

ほうぼうの雪上から声。小さく。

広岡の声 …高川くーん、大丈夫かのう…？

高川の声 …大丈夫ちや、広岡くーん…。

広岡の声 …福長くーん、大丈夫かのう…？

静寂。

広岡と高川の息 …ハア、

…ハア、

…ハア、

…ハア、

…ハア、

広岡と高川、ストックを手に這い出てくる。

広岡は腰を押さえつつ、高川は肩を押さえつつ。

広岡・高川 ハアアアア！

広岡と高川、抱き合う。

広岡・高川 福長くーん…！

宝島

静寂。

広岡と高川の声、凍えてヘラヘラと早回る。

広岡 一体何があったんじやろうか。

高川 僕らあ3人、もうちくつとで山の神が立つちよるあの峰に届くとこやったやいか。

広岡 3人の山の神がこうー手を伸ばして、

高川 僕らあ3人もこうー手を伸ばした。

広岡 山の神の手はぬくぬくしよーた。

高川 ぶにぶにしちよった。

広岡 繋いだ手に力を込めて、もう片っぱの手で雪肌をストックを突き立てた。

高川 峰の上に足をかけて、誰もまだ踏んぢやらん雪の頂に、一步、登って立った。

広岡 その瞬間、足元が崩落した。

高川 僕は見たちや。福長くん(せつび)の足が雪庇を踏み抜いたがよ。

広岡 雪庇、雪庇かあ、吹きだまった雪の庇は、地面と判別ができんげえ。

高川 僕らあの目をだましておとし陥れよるき。

広岡 福長くんが崖下へ落ちていって、

高川 ブロック雪崩が起きた。

広岡 掴んですがりつこうとしたけれど、山の神の手は爪を立てて、突き放しよーた。

高川 山の神は笑つちよった。

広岡 とたんに周りが真つ暗になった。

高川 ザザザザー、

広岡 ドドドドー、

高川 雪の塊がザックをかすめて落ちていつちゆうのがわかる。

広岡 パーカーの首から背中(ひさし)に大量の雪が入りよーる。

高川 ザザザザー、

広岡 ドドドドー、

高川 音の中で僕はただただうずくまっちよった。

広岡 僕もうずくまりよーた。

声 …ううー。 (遠く深く小さく)

間。

広岡・高川 福長くん…!?

広岡 どこじゃあ。

高川 見えん。

広岡 埋もれとろう、雪ん中!

広岡・高川 福長くん福長くん福長くん福長くん!

広岡 広岡と高川、自分のザックのポケットからチョコをたくさん出して、ほれ、チョコば食べんねー!

広岡と高川、そこらじゅうにチョコをばらまく。

間。

声 …ううー。

広岡 福長くん!

宝島

声 よかよ。こげんおいは食べきらんばい。(遠く深く小さく。楽しげに。
ブツブツと早回る)

高川 どこにおるが！？

声 あんたにやるけん食べない。

広岡 誰と話しょーんじや？

声 好きなだけやるけん。山ガールさん、ほれ、手ば出して、はい。

高川 山の神と話しゆうが？

声 (ちよっと笑って) なし手出さんとや、おかしかね。

広岡・高川 福長くん！ おーい！

広岡と高川、そこらじゆう這って、手で雪を(部屋のゴミを)かきわけて、
福長をさがす。

広岡・高川 ハア、ハア、ハア、ハア、(続く)

声 (ブツブツと早回って、笑い話をするかのように) 山ガールさん、こないだね、
僕がくさ、友達と一緒に魚の民で酒ば飲みよったつたい。そしたらくさ、北国で
働きよう友達の内田くんが突然電話のあつて、今がらしよっち行くからつち言
うんたい。約束の、サバイバル登山やーつち。おかしかやろう、そげなこつ。ば
つてん行こうーつち約束したんは神戸ん大学ん冬ばい。なし今ごろーつち聞いた
ら、追悼記念やからーつち。誰ん追悼つち聞いたら、広岡くんと高川くと、き
みのーつち言つたつたい。20年目のーつち。おかしかやろう、ほんなごと、今
僕ん目の前に広岡くんと高川くんはおつて、一緒に枝豆パリパリ揚げばつまみな
がら酒ば

広岡・高川 福長くん！

手を見つけた。雪をかきわけて引つ張り出す。

広岡・高川 福長くん福長くん福長くん！

引つ張り出された福長、ばらまかれたチョコを掴んで手を突き上げる。

福長 ほれ…！

広岡・高川 福長くん福長くん福長くん！

広岡と高川、福長の頬を叩きまくる。

福長 痛か、痛かつち、(笑いながら、広岡と高川の叩く手を掴んで止めた途端)

あ。また声んすつたい。

広岡・高川 ん？

福長 うめき声。

声 …ううううーううううー

遠い背後で声がする。小さい、太い、低い、長い。内田つばい。

広岡と高川、福長に肩を貸して、よろよろと立ち上がる。

声の方へ足を踏み出す。

プツンと切れるようにすぐ次。

○妻と守と土井と松下

妻、壁の上着を慌ただしく引き剥がそうとして、

妻 帰ります。

宝島

守 へ、
土井 何で、(即座に包帯の手で壁のハンガーを押さえて)
妻 やから放棄しますって。(上着を引っ張って)
土井 卑怯ですそんなの。(押さえた手を離さないで)
妻 卑怯で結構です。
(上着を諦め、床の上の自分と守の鞆を引ったくるように掴んで)
守 帰ろ、守くん。
土井 あさ子さん。
土井 駄目です。(妻の両手の鞆を引っ掴む)
妻 離して。(鞆を引く)
土井 嫌です。(引き返す)
妻 もう！ 触らんとって！(引っ張って揺する)
守 あさ子さん！ あさ子さんって！
妻 守、妻の身体を背後から抱えて力づくで引き離そうとする。
守 何で！ 守くん何で！
妻 何でって、片付けるんだろ。
守 もういいやん。
守 順番に片付けようって、最初に自分が、(引き離す)
妻 片付かへん。散らかるばつかしでいつも処理できへん。
守 逆にどんどん汚いもんばつかし見えてまう、見られてまう。
守 いいじゃんもう見えたって見られたって。せつかくここまで来たんだしき。
妻 来たけど。
守 ちゃんときれいにしよう。(鞆を置く)
妻 一つずつ、手掛かりを辿って。(レシートを拾って)
妻 ゴミの山脈を辿って?!(自分の鞆を取って戸口へ)
守 きちんと始末して、今度は幸せになるんだろ。
妻 幸せって！
守 俺らの探すべきものを探そう。(レシートを渡して)
守 帰りの列車、最終まではまだ少し時間ある。
松下 帰れませんよ。(淡々と)
妻 戸口に松下が入ってくる。
妻 大きなライフマートの袋を抱えて。
妻 大袋の中にはたくさんさんのゴミ袋パックが詰まっている。
妻 妻・守 …は。
松下 帰り道、もうないですよ。
妻 ないって何。
土井 松下さん？
守 どういうことですか。
松下 私今さっきライフマート行ってきたんですけど、
あのですぐ先で崖崩れがあって、町へ降りる道埋まっています。

宝島

3人 え。
松下 私ライフマートに車置いて歩いて見に行きました。
妻 路肩の山半分なぎ倒されて、道塞がってます。土砂と倒木と雪。
松下 嘘。
妻 嘘だと思ふなら見に行ってみたらどうです？
土井 ま、タクシー呼んでも来ないですけど。
妻 あそこ塞がると駅へは無理ですからね。
松下 別の道とかあるでしょう。
妻 ないです。
守 向こうからとか、
松下 向こうは灯台。
妻 灯台を回ってその先から、
土井 その先なんかいいですよ。
松下 あの道一本です。
妻 駅から町を抜けてぐるりと登ってくる、ここは一番の高台、どん突き岬です。
松下 帰れないやなんて、ほな私らどうしたら、
妻 私ら？（妻と守を一瞥して）
土井 待つしかないですよ。復旧と、再通を。
守 待つって。
妻 そんなん困る！
松下 私は、（土井に目配せて）さほど困らないですけどね。
土井 だって、すでに陸の孤島でしたから。これまでもここは。
守 ま、ライフマートまでは行けるわけですし、数日くらいどうにかしのげるでしょう。
守 数日。
妻 どうにもなれへんわよ。仕事だってあるのに。この人も明日は。
松下 この人。（守を一瞥して）
守 ああ、そうですね。なるほど。お2人でさっさと逃げたいわけですね。
松下 そんな、逃げるだなんて。
土井 じゃちようどいいじゃないですか。お2人で待てば。内田さんの帰りを。
松下 そうだ、探す時間も片づける時間もたっぷりできたことだし。
松下 はいこれ。
松下、妻にライフマートの大袋を押し付ける。
妻、中身を見て、
妻 またゴミ袋。こんなにもいらんし。
松下 あんなにも欲しがってたのに。
妻 待ったところで、あの人、帰って来ないですよ。絶対。
松下 断言ですか。
土井 何でそう言い切れるんですか？
妻 帰るはずないやない。

宝島

そらもう、帰ってくる道塞がってるんなら。

妻、ライフマートの大袋にレシートをぼいと放る。

大袋と靴を床に置く。

その手を服の裾で拭いながら、

妻　もう行き詰まりやし、通じてないし。ここへは。

よう帰ってこられへんわよ。

土井　あー、それもそうか。断絶ですね。こつちとあつちは今や。

松下　それでも、針の穴のような糸口を願うものじゃないですか。

何とかどうにか帰ってきてほしいって。普通なら。

妻　普通って、…何なんやろか。

土井　松下さん、もう普通じゃないでしょう。この状況は。

松下　そうか。そうですね。普通じゃないか。ねえ、奥さん、あの、あなた、

妻　はい。

松下　実は知ってるんでしょう。内田さんの本当の行方。

妻　へ。

土井　松下さん。

守　どういうことですか。

松下　何も知らないふりして。

妻　ふりって何。

松下　初めてここへ来たふりして。

守　本当は4日前にもここにいて。あなた、あの朝、内田さんを殺して。

妻　は。

土井　あの朝？

妻　何言い出しはるんやろ。(少し笑って)

松下　内田さんをあの海に棄てて、あなた、何もなかったことにして。

妻　何ですかそれ。

松下　これは私の妄想です。

守　妄想でしょう、ただの。

土井　妄想ですけど、どこか何だか、

妻　しませんよそんなこと。

松下　しかねないなあって話ですよ。潔癖の奥さんなら。

邪魔なものを棄てて、すっきり片付くし、きれいに始末できますし。

妻　できたら簡単な話ですよ。

松下　ほら恐ろしい。してない証拠ないですし。

妻　証拠…？

守　証拠…！

守、突如、床に這いつくばって、ゴミの山をあさり始める。

土井　何してんですか。

守　探します、証拠。

妻　守くん。

宝島

守 探せよ。(妻の手を引っ張って床へ) ほら。

手を汚さずに片付けようたって無理だよ。

妻、ゴミの山を掘り返す。物凄く手を震わせながら。

松下 わあ、宝探しですか。

妻 違う、屑探しですよ。

土井 一体何が隠されてあるんですかね？

妻 離婚届。

松下 へえ、離婚届。

土井 ああ、離婚届。

守 このために来たんです。本と言うと今日。俺たち。

妻 (探しながら) ひと月前に私、名前書いて送ったんです。

やけどあの人、全然返してくれなくて。

ねえ土井さん、

はい、

妻 私、最後の電話、ひと月前言うたけど、ごめんなさい、ほんまはその後電話し

たんですよ。何べんも。

土井 そうなんです。内田さんは何て。

妻 全然つながらなくて。出てくれなくて。話せることも話せんかって。

今になって。こんなことになって。もう何のせいやらわからんようになってもうて。

いつの間に私らこうなってもうたんやるか。

子供がおらんかったせいやと思うんです絶対。

ちよつとずつ、ちよつとずつ、おかしなつていつて。

(妻のお腹を見て) 子供。

妻、またゴミの山を探しながら、

妻 うちら結婚して10年、子宝に恵まれへんかったんです。

私もあの人も、心の底から子供ほしくて、ずっといろいろ治療してて。

土井 ああ、治療ってその。

妻 はい。うちらはもう、自然には望まれへんやろって、人工に切り変えて、

検査して、注射して、薬飲んで、人工授精して、失敗して、体外受精して、

また失敗、また注射、薬、授精、失敗。そのくり返しやって。

妻、ゴミ袋バックを一つ引き破つて、ゴミ袋を出して、コンビニフードの

ゴミの山をあさつて、捨てていきながら、

妻 こらもう身体ん中からきれいに変えなあかんって、うちら逐一気配って、自然

食品、健康水、禁酒、禁煙、サプリ、漢方、鍼、祈祷、瞑想、除霊、全て何でも

取り入れて、チャレンジして、失敗して、くり返して、何年も。

うちらだんだん頭ん中までおかしなつて、もう子供のことしか考えられんような

つて、街へ出て赤ちゃん見かけるだけで、息もできんようになって、立ち止

まって、自分らが何や社会的に役立たずに思えてしやーなくなつて。

…そんな中で、あの人がぼつんと「…今日内示出たわ。転勤やて」言うて。

私赴任地聞いて、ものすご止めたんです。「そんな断つたらええやん」て。

宝島

土井 「断れるか」てあの人言いました。
そりやそうでしょう。

妻 そらそやけど、うちらだいーぶ考えて考えて、ここで治療して、産めるやろ
かって。ほんで最終あの人が「俺だけ行くわ」言うて、単身赴任決めて。
そう言うしかないでしょう。

妻 「ついて来るな」って何べんもあの人。
「俺行ったら手当でるし、昇給するし、未来の子供のために」
言うて、あの人。

妻 守は黙々と床を這って探し続け、妻もゴミの山をあさって捨て続けて、
話す。ゴミ袋が一杯になったら、次また次と。

妻 ほんでうちら夫婦は遠距離で暮らして、マイナス200℃で冷凍保存された
凍結精子使^{つこ}って、離れ離れで子作りしました。
何やこれ、何してんねんって思いながらしました。

妻 松下 けどやっぱり失敗で、うまいこといきませんでした。うちらは。
何ですか、単身赴任が離婚の原因ですと言いたいわけですか。
違う。違うけど、遠くへ離れたら、ものは見えへんようなるやないですか。
ほんまはどう暮らしてるとか、ほんまはどう思ってるとか。
一番知りたいとこ見えへん。

妻 ゴミの山の中、内田が入ってくる。ライフマートのコンビニ袋を下げて。
私神戸の家で一人、毎日毎晩妄想しました。

妻 内田、床に座る。テレビをつける。
試験電波発射中のテロップとカラーバーの画面と発射音。

妻 電話で「晩ごはんは町の何ちゃら食堂で食べた」って聞いたら、
あの人毎日ちゃんと食べてるんやろか、私が送った自然食品食べてへんのちゃう
やろかとか、気になって気になって、

妻 インスタントやらジャンクフードやら食べ散らかしてるあの人を妄想して、
内田、袋からホープを取り出す。もそもそと。

妻 外装のフィルムを開ける。
「今日残業やった」って電話で聞いたら、ほんまは早よ終わってたんちゃうやろ
かとか、気になって気になって、
知らん女といちゃついて抱き合ってるあの人を妄想して、

妻 内田、タバコを取り出す。
火をつけようとするが、ライターが見当たらない。
手近なゴミの山をかき分けて探す。もそもそと。

妻 「違う、大丈夫」てあの人がどんだけ言うても、もう言葉なんか信じられんよ
うなって。真実がどこにあるんかわかんようになってきて。
どんどん悪い妄想ばかりして、それ全部全部確信を持ってきて、

妻 内田、布団の下に手をつっこんで探る。
あの人の存在を信じられなくなつて、どんどん距離は離れていって、
いないものと同じになつて。

宝島

松下 ほらやっぱり殺してるじゃないですか。

内田、布団の下から100円ライターをとり出す。

妻 やから殺してないって！

松下 黙殺ですよ。

内田、着火しようとするが、火がつかない。

妻 え、黙殺…。

黙殺は殺人と違うやん。

松下 …結果的に人を殺すことだってできますよね。

内田、何度か試すがつかない。

松下 ここで頑張ってた内田さんを黙殺して、その給料で自分は遠い所でしれっと暮らして、しれっと別の男に手を伸ばして。

妻 しれっとやない、

守 すいません俺が、

松下 平然と子供はらんで。(妻のお腹を指さす)

妻 平然とやないです！

守 俺が黙殺しました！ すいません！(頭を下げる)

妻 何で！

あの人かて全くそっくり同じ罪やないですか。(松下のお腹を指す)

松下 内田さんは罪じゃない。救いです。

妻 何の救い？

私にひとつ、ここを去る理由を与えてくれました。(お腹に手をあてて)私を助け出そうとしてくれた救世主です。

内田、100円ライターをゴミの中にぼいと捨てる。

試験電波発射中の画面、電波は乱れてブロックノイズが起こる。

カラーバーは波打ち、発射音も途切れ途切れ、モールス信号のようになる。

土井 救世主、

妻 どこが救世主なん。自分から真っ先にここを去っというて。

土井 や、特別家出人ですよ。もうこれは。どう考えても。

妻 特別。

内田、タバコを手にしたまま、波打つカラーバーを見ている。

深夜テレビを見るかのようにぼさーっと。

土井 やっぱり警察行きましょう今から！ ね、皆さん。

(懐から車の鍵を出す。包帯の手で。)

松下 警察への道理まっています。土井主任。

土井 あ、そうか、じゃあ電話しましょう！

ちゃんと捜査してくれますよ。特別家出人なら。

土井、鍵を懐に閉まって、携帯を出す。包帯の手で。

携帯を妻に差し出す。

突如部屋の灯りが落ちる。

宝島

テレビ画面も消える。

松下・土井 あ、

妻・守 え、

うす暗い。

間。

土井、灯りのスイッチを付け消しする。包帯の手で。

土井 あれ、

暖房の吹き口に手を上げる。包帯の手で。

土井 止まっていますね。

内田、ふらりと立ち上がって掃き出し窓のすぐ際へ。

座って、外を見る。

土井 ああ、展望台の電気も消えていますね。

土井、掃き出し窓を指差す。包帯の手で。

妻 え、でも監視塔の電気ついてるじゃないですか。

妻、掃き出し窓を指差す。包帯の手で。

土井 監視塔は非常電源がありますんで。

妻 ああ、そう。

土井、テレビのリモコンを取り、何度か電源を押す。包帯の手で。

土井、一連の動作、包帯の手で行う。うす暗い中で包帯の白が目につく。

松下 停電ですかね。

土井 いいですよ（リモコンを置いて）夕方まではまだ少しあるし。

ちよつとしたら復旧するでしょう、電気は。

ともかく奥さん、警察に電話を。

妻に携帯を差し出す。

妻、受け取らない。土井の包帯の手を見ている。

妻 ねえ土井さん、

はい、

ところで土井さんは…、なんでそんな親身にあの人捜してるんですか？

…え、そりゃ捜すでしょう。人一人いなくなっただけですよ。

心配するでしょう。

社員一人いないと、工作上困るからですか。

それとも、土井さん個人的に、心配なんですか。

両方ですよ。もちろん。

妻、のろのろと手を伸ばして、土井の手ごと携帯を握る。

土井 あの、奥さん。

妻 土井さん、…この手えの怪我、どうしたんですか。

土井 …ちよつとした火傷です。

何して火傷しはったんですか。

土井 ちよつと、…熱いものに触れて。

妻 熱いもの？ 触れたんはいつですか？

宝島

松下 …あ、4日前ですよ。夜勤明けた交代の時。そういえば私、ああ、土井主任包

帯だ、白いなあって思いました。

妻 土井さん、手、震えてますね。

土井 や、震えてるのは、奥さんの手ですよ。

妻 あら、そっか、そやわ。

松下 不潔だと思ってるんですね。土井主任の手を。

妻 そうかも。(そろりと手を引く。携帯を握って)

土井さん、火傷したとき、血出ました？

土井 血、

守 血。

守、そろりと掛け布団をめくる。

丸まったティッシュがたくさん。赤茶褐色の。

松下 あ、

土井 ああ、

守 これ、何なんですかね。

松下 これ、

妻 土井さんの血ですか？

土井 私じゃないです！(首を振る)

妻 じゃああの人の？

松下 内田さんの血、

松下、ティッシュをひとつ、手に取る。愛しいものに触れるように。

その血を見る。何か通じ合うかのように。

土井に差し出して見せる。

妻 土井さん？

土井 みんな血流してんですよ。

妻 は、何言うてはるんですか。

土井 これは私の妄想です。

理由の知れない血を流してるんですよ。内田さんも、私たちも。

妻 何ですかそれ、そんな妄想。

守 でもその妄想は私もどこかで。

松下 けど妄想で血は流れるんでしょうか。

妻 土井さん、(携帯を差し出して)電話してくださいよ。あなたが。

土井、携帯を手にとる。

土井 奥さん、私、気付いたこと、特に何もと言いましたけど、

ごめんなさい、ほんとはあの朝、内田さんと話したんです。ちよつと。

あの監視塔で、二人で仕事した夜明け。

土井、110のダイヤルを押す。

松下、ティッシュをぼろりと布団に戻す。

プツンと切れるようにすぐ次。

○土井と内田

宝島

監視塔。夜明け。

内田、静かに窓を開ける。

波の碎ける音。

内田、窓際に立って海を見ている。

タバコを手にしたまま。

内田　なあ土井くん、あ、ちやうわ、土井主任。

土井　はい。

内田　ライター貸して。

土井　何べん言ったらいいんですか。ここ禁煙です。下降りて吸いましょうよ。

内田　今日だけ。(少し笑って)

土井　毎日今日だけです。(少し笑って)

内田　今日はほんまに今日だけ。今日で最後。約束します。ライター貸して。

土井、ポケットからライターを出して、内田に渡す。

几帳面そうな、細いシルバーとかの。

内田、タバコに火を付けて、

内田　ふー。(煙)

今朝はえらい海霧かいむやな。

土井　ええ、海霧。きれいですね。何度見ても。

内田　こんだけ霧が多いと、なんや波か雲かわからんようになってくるな。

土井　はい。ちよつと距離感見失いますよね。

内田　山の頂上から見る日の出の雲海うんかいとそっくり。

今自分が海の上か山の上か、どこにおるんかわからようになってくる。

わき上がってくる。

内田、ふーと煙を吐く。

内田　なあ土井くん。や、ちやうわ、土井主任、アカン慣れへんわー。

土井　いいですよ。土井くん。

内田　や、昨日から主任は主任ですよ。(少し笑って)

土井　ああまあ、ですけど。(少し笑って)

内田　ねえ土井主任、エネルギーって何なんやろな。一体。

土井　へ。何ですか急に。

内田　毎日毎分毎秒、僕らここで、海洋エネルギーの数値やら記録やら見てるわけ

やけど。

土井　はい。

内田　わけのわからん塊くわいよな。(へらへら笑って)

エネルギー正直いっこもわけへん。もう僕。

働くエネルギーわいてこうへん。僕。

土井　何言ってるんですか、内田さん。

内田　何やってるんですか、土井主任、僕ら、ここで。

町を救う未来のクリーンエネルギーとかいうて、いまだに実現せえへん。

どこ救ってんねん、救えるかい、救われへんやろ。僕らも、誰も。

宝島

土井 や、救うとか救われるとかその前に仕事ですし。これが私たちの。

内田、煙を吐いて、

内田 主任、僕、仕事、卒業しよか思ってます。(へらへら笑って)

土井 卒業って。(へらへら笑って)

内田 働くの、もう終わろうかと思ってる。

土井 本気で言ってるんですか。内田さん。

内田 はい。

土井 タバコ片手にですか。

内田 はい。

土井 何ですか。

内田 一身上の都合です。

土井 一身上って、人には言えない理由だからでしょう。内田さん。

内田 あー、まー、そかなあ。(煙を吐いて)

土井 困ります。

内田 松下さんもうなくなるのに。

内田 え、そうなん、松下さんやめるん？

土井 他人事ですか！ 内田さんのせいですよ。

内田 僕のせいって何。

土井 松下さん、ご実家に帰って、出産されるそうです。

内田 おめでた退職やな。(煙を吐く)

土井 どこがおめでたいんですか！

土井、内田のタバコを掴みとる。

内田 おめでたいやん。松下さん、こんな所に一人でおらんと、故郷に帰れて。

土井 子供も産めて。

土井 内田さん！

突如土井、内田に掴みかかる。

内田、無抵抗に掴まれたまま、

内田 ま、祝福できへんか。知ってるんで。土井主任、松下さんのことひそかに好きやっ
たやろ。

土井 知ってますよ。内田さん、松下さんのことも、寮に連れ込んでる他の女のことも、
いろいろ！ たくさん！

内田 (へらへらと) それが何い。

土井 何って！(締め上げる)

内田 (へらへらと) 人類を、滅亡から救うためや。

土井 はあ！？(さらに締め上げる)

内田 僕の妻が言いました。何年も前、ここのニュースのテレビ見ながら呪文みたい
に。私、ようけ人が死んだ数だけ、ようけ子供産まなってる。

土井 このままやと人は滅んでまう。私たくさん子供ほしい。たくさん産みたい。
今産みたい。産まな産まなってる。

土井 俺にできることは何や、俺が役に立てることは何やろう、何やねん、救済措置や。

宝島

植樹やいうて木い植えてんと、種をまけ、種をまこう、種を！
子供は宝や、宝、宝をまこう！

土井、何か叫んで、内田の顔を殴りつける。何度か。

内田、何の抵抗もせず、殴られるままになっている。

内田

土井くん、

土井くん、

なあなあ土井くんって、

土井主任！

土井、手を止める。

内田

(土井の顔を指して) 自分血、血、血出てんで。

土井

：内田さん、

土井、血を拭う。

ポケットからティッシュを出して拭く。

内田

(ヘラヘラ笑って) 何で殴られてもない奴が血出してんねん。
おかしいやる。

内田もポケットからティッシュを出して、血を拭いながら、立ち上がる。

窓から海を見て、また一本タバコを手にする。

突如、霧笛が鳴る。数十秒間隔で、断続的に。

土井

あ、

内田

何や、この音。

土井

霧笛ですよ。灯台の。

内田

廃止灯台やのに何で。おかしいやん。

土井

私が赴任してきた年にも鳴りました。ちょうどこんな時期に。

内田

思い出したみたいに暴発して。おかしいですね。

土井

まだ役に立ってた頃の記憶やるか。

内田

プログラミングされて消えないんでしょうか。

土井

今でも役に立ちたいっていうエネルギーやるか。霧笛の。

内田

もう船も出ないのに。霧の海には。

土井

もしかして、怪物が来るのを知らせてるんかも。声をあげて。

内田

怪物？

内田

この女たちはみんな言う。海さ怪物がいるって。

土井

ほら見て。あっこ。

内田

首の長い生き物がおる。

土井

あれは、

内田

赤い脚、赤い腕、赤い首。血を流してる。

土井

雲の波から顔を出して、こつちを見てる。

内田

内田、血を拭いたティッシュを捨てる。(布団の上に)

土井

あれはうちの会社の昔のプラント。

土井

土井も血を拭いたティッシュを捨てる。(布団の上に)

土井

大量の海鳥の声。飛び立ってこちらへ来て空を覆う。

宝島

内田、そろりと窓を閉める。

内田　ここは魔境や。

霧笛。

プツンと切れるように次。

○ワンダーフォーゲル部 4

声　…うううー。 (内田っぽい声。霧笛にも似ている)

3人　ハア、ハア、ハア、

広岡と高川と、肩を担がれた福長、声の方へ歩いている。よろよると。

熊よけの鈴の音。

広岡　向こうも近付いてきよーる。

高川　助けを求めちゆうがよ、僕らあに。

3人　ハア、ハア、ハア、(歩いて近づく)

声　…うううううー。 (狼っぽい声)

広岡・高川　(立ち止まって)え。

福長　この声。

3人の男、肩を組んだまま、ゆっくりと踵を返す。

歩を早める。

3人　ハア、ハア、ハア、(歩いて遠ざかる)

声　…うううううー。 (狼っぽい声)

高川　ついて来ちゆう。

広岡　こりやあ何の声じゃ。

高川　リーダーか？

広岡　人間か？

福長　狼やないと？

声　…うううううー。 (熊っぽい声)

福長　…熊たい。

3人、こわごわ後を振り返る。

広岡　おらんが何も。

高川　見えんき何ちゃー。

声　…うううううー。 (熊っぽい声)

福長　熊やろうもん！？

広岡　ハッハッハッハッハッハッ！ (息)

広岡、突如狂ったようにその場で走るみたいに、なんかものすごく足を踏

み鳴らす。超速で。変な格好。笑けるぐらい。

高川　広岡くん何しゆうが！？

広岡　熊よけの鈴じゃあ。

高川　おお、そうちゃ。

高川もする。

広岡・高川　ハッハッハッハッハッハッ！ (息)

2人、鈴を鳴らして、ぐちゃぐちゃのサンバっぽい変な踊りみたいなこと

宝島

松下 都合の悪いことは話したくないし、亀裂は隠したいし、何ごともなかったように
はな

守 目をそむけたいものは、どこか奥底にしまいこんでしまおうし。
離婚届も。見たらない。

旅の女の声 おーーーーーい。おーーーーーい。(遠い。小さい)

ふいに外から声が聞こえる。

全員、掃き出し窓から岬の方を見る。

妻 何ですか、あれ。

土井 旅行者ですね。さっきの年配の。

旅の男の声 おーーーーーい。おーーーーーい。(遠い。小さい)

妻 何してるんですかね。

土井 さあ、呼んでますね。

松下 呼び合ってますね。

守 女の人、全然振り返らないで歩いてきますね。

土井 岬から、こちらの方へ歩いてきますね。

旅の男の声 おーーーーーい。(遠い。小さい)

妻 旅行いうて何を見るんですかね。こんな雪ん中。

掃き出し窓、目の前に女子高生が駆け込む。

雪に降られて。凍える息を吐いて。

女子高生 あのっ。

守、探す手が止まる。

戸口に食堂の女も駆け込む。

雪に降られて。凍える息を吐いて。

食堂の女 あの。

女子高生 すいませんっ。

食堂の女 すいません。

妻・土井・松下・守 え。

女子高生、掃き出し窓を開ける。

女子高生 道が埋まってて。

食堂の女 道が埋まってて。

女子高生 家いえさ帰れなくて。

食堂の女 店みせさ帰れなくて。

女子高生 行くとごねぐて。

食堂の女 ござしかねぐて。

女子校生 雪で送電線も切れて。

食堂の女 ござら一带停電だつて。

女子高生 寒くて。

食堂の女 寒くて。

女子高生 中さ入れて。

食堂の女 入れてください。

宝島

女子高生、部屋へ上がって窓を閉める。

女子高生・食堂の女 ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、

女子高生と食堂の女、凍えた手を息で温める。

女の声 ヒロシサン、ヒロシサン、ヒロシサン！

玄関から女の呼ぶ声。片言の。

戸口に女（コンビニの女）が駆け込んで来る。

コンビニの女、ライフマートの制服姿。防寒着も着ていない。

妊婦である。誰よりも大きいお腹。寒さに震えながら。

妻 え。

コンビニの女 ハア、ハア、ハア、ハア、

ヒロシサンドコ？！

妻 あなた誰？

コンビニの女 ウチダヒロシサンノ、コンヤクシヤデス。

妻 は、

守 婚約って、

土井 だってあなた、

松下 ライフマートの、

コンビニの女 ウオン、ト、イイマス。ハア、ハア、

コンビニの女、胸元の名札をつまんで見せる。「王」と書いてある。

女子高生 アンタ毎日レジさ入ってる、

食堂の女 何時に行っても働いてる、

コンビニの女 オソレイリマス。ハア、ハア、

コンビニの女、ペコリと頭を下げる。

コンビニの女 アノ、ヒロシサン、イマ、キタデスカ？

妻 今？

コンビニの女 ハイ、サキホド、ワタシミタデス。

ミセノムコウ、ガケクズレテ、イッパイヒトノトコロ。ヒロシサンタツテタ。

松下 え、先程って？

コンビニの女 アナタ、イッパイゴミブクロカッタスグ。アナタミタデスカ？

松下 いえ、見てないです、全然。

女子高生 秋もあそこまで行ったけど、ウッチーなんが見てねえ。

食堂の女 私も。ごさ引き返す道でも内田さん見てねです。

コンビニの女 オカシデスネ。ヒロシサン、ドコサニゲタダロウ。

妻 逃げた？

コンビニの女 ヒロシサントワタシ、ヤクソクシタデス。

イッシヨニニゲヨウユッタ。

マチアワセシタデス。オトトイノマエノマエ。シハツノエキ。

松下 一昨日の前の前っていうと、

土井 あの朝。

コンビニの女 デモ、ワタシ、シハツオクレタデス。ワタシ5サイノムスコイマス。

宝島

タイガ、イカナイユッタ、ワタシコマッタ、オコッタ、タイガナイタ、
タイガノテヒツパツテエキサイッタ。デモ、オクレタデス。

エキ、ヒロシサン、イナイデシタ。

妻 ……逃げようって、どこ逃げるつもりやっただんですか。

コンビニの女 ココノトオクドコカ。イッパイヤマコエテ、トオイムラ。

守 山…。

守、さっき妻が捨てたライフマートの大袋を拾う。

コンビニの女 ワタシ、チューゴクノトテモニシ、ルーフォントイウ、ヤマノムラカラキ
タデス。デカセギ。ダカラ、ウミノマチツライデシタ。

守、あのレシートを拾い出して妻に差し出す。

妻 ……これ…。

妻、レシートを開いて、コンビニの女に差し出す。

コンビニの女 コレ、ソーヨ、ヒロシサンユッタデス。

ヤマイコウ、クウキキレイイナヤマノムラデ、ケツコンシヨウユッタ。

コンビニの女、レシートをなぞって、

コンビニの女 ドコガエエカナ、トニカクニシエニゲヨウ。

ココカラココエ、アブクマコーチ、カントーサンチ、アカイシキノヒダサンミヤ
ク、キーサンチ、チューゴク、シコク、キューシューサンチ。

コンビニの女、手を合わせるようにレシートを大切そうに挟んで持って、

コンビニの女 ダケド、サキホド、ワタシミタデス。ホントミタデスヨ。ヒロシサン、
ヒロシサン、ヒロシサン…！

コンビニの女、口元に手を合わせたまま、膝についてしゃがみ込んで
唱える。

○旅の女と旅の男

掃き出し窓の前に旅の女が立つ。ふらりと。

窓から中をじっと見ている。

手に何か握っている。

土井 あの、(掃き出し窓を指す)

全員 ……

妻、掃き出し窓をそろりと開ける。

妻 はい？

旅の女 失礼ですが、私の息子を知りませんか？

妻 息子？

旅の女 行方が知れなくなりました。

旅の男 おい。

旅の男、旅の女の隣に立つ。

旅の女、手に握っていたホープの箱を大切そうに見せて、

旅の女 今さっき、岬の突端に落ちてました。まだ入ってます。

息子が吸ってたタバコです。

女たち ……あ、

宝島

コンビニの女 ……ホープ！

旅の男 すいません、息子なんていないんです、もう。

旅の女 あ、ホープ…。ホープ。

旅の女、布団の脇のたくさんのホープの空箱を見て、

ふらふらと部屋の中へ上がる。

符号のように自分の持っている箱を合わせながら、しゃがみこんで、

旅の男 おい。

旅の女 あの子のホープですよ…。

旅の男 おいって。

旅の女 ここだったんですね。あの子の家は。

旅の男 すいません。すいません。

旅の男、部屋の中へ上がって、旅の女の手を引く。

旅の女、しゃがみ込んだまま見上げて、

旅の男 帰ろう。

旅の女 ……あなたどなた？

旅の男 ……。

旅の女 困ってるんです。この男の人、ずっと私の後をつけてくるの。

助けて。

旅の女、しゃがみこんだまま、守の服の裾をちよつとつかむ。

旅の男、力なく女の手を離す。

守 ……大丈夫、大丈夫ですよ。（旅の女の手にそつと手を添える）

妻 ……何が？

松下 ……どこが大丈夫なんですか。

守 ……や、何となく。守ってあげたくて。

土井 ……避難所ですね。

もうまるで。この部屋は。

土井と守、旅の女とまわりの女たちをぐるりと見た。

コンビニの女 ヒロシサン、ヒロシサン、ヒロシサン、

コンビニの女、布団の脇のホープの箱をかき集めるように手に取る。

旅の女 いやあね、あの子ったら、だらしがいいですね。

お布団も敷きっぱなしで。

しゃがんだままの旅行者の女、敷布団をたたもうとパタツと上げる。

たくさんのレシートがパラリと舞い上がる。

全員 あ…！

敷布団の下に大量のレシート。

妻 レシート。

女子高生 いっぱい。

食堂の女 こんなに。

松下 ライフマート。

コンビニの女 ヒロシサン、マイアサキタデス。マイバンキタデス。

宝島

イッパイノモノ、カッタデシタ。

旅の女、レシートに手を触れる。まるで息子の身体に触れるみたいに。

女子高生 わあ、ウッチーの抜殻だ。

妻 違う、あの人の残骸よ。

食堂の女 違う、内田さんの血と肉。

松下 違う、内田さんの結晶です。

女たち、レシートを一枚一枚手に取って、買ったものを見ている。

ブツブツと読み上げていく。

妻 から揚げ弁当、にぎわい幕の内、スペシャル白身フライ弁当、

松下 プレミアムロールケーキ、苺と生チョコペアケーキ、

食堂の女 極旨、のどごし生、おでんだいこん、おでんたまご、

女子高生 ポテトチップスうすしお、なげわ、

旅の女 ホープ、ホープ、ホープ、ホープ、

コンビニの女だけは、何も拾わず、山脈の書かれたレシートをじっと見ている。

ブツンと切れるようにすぐ次。

○ワンダーフォーゲル部 5

内田の部屋にいた人たち、そこに残ったまま。

広岡と高川と福長、死んだように横たわっている。

大量の海鳥の飛来する羽音と声。

広岡と高川、目を開ける。横たわったまま。

広岡 …あ。

高川 …あ。

広岡 鳥じゃ。

高川 海鳥ちや。

広岡 何でこんな山まで。

高川 今から南へ渡るんやいか。

広岡 こんなに大量に。

高川 大量に生まれてから。

広岡と高川、身を起こす。

広岡・高川 ハア、ハア、ハア、

広岡と高川、とても震えている。

広岡 怪物は？

高川 もうおらんかったんか。

広岡 まだ潜んどるだけなんか。

高川 声のせん。

広岡 福長くんを食べて、去ってしもうたんじゃるか。

高川と広岡、遠くを見はるかす。震えながら。

高川 広岡くん、寒いなあ、

宝島

広岡 ああ、寒みーなあ、高川くん。
高川 限界ちや。ビバークしよう。ここで。
広岡 ああ。ツェルトを張ろう。ここで。今夜は。

高川と広岡、ザックを肩から降ろす。
ツェルトや衣服を探そうと、ザックの奥底を探る。震える手で。
あ、にのいのする。

高川
広岡
高川
においの？
ザックの底。家のおい。

広岡と高川、ザックの奥底に手をつっこんでにおいをかく。
シンナーを吸うみたいに。

高川
広岡
高川
ほんまじゃあ。僕も家のおいする。
荷物と一緒につまってきたがよ。
僕の家のにおい。

広岡 大学の下宿るとき、実家の母さんから届いた小包も、開けたらこんなふうにかのにおいしよーた。

高川 おお、しちよった。故郷こきょうのにおいしちよったなあ。
広岡・高川 (嗅ぐ音) スースースースー。

高川と高川、狂ったようにザックの匂いを嗅ぎまくる。音を立てて。
暫く。

高川 (顔をあげて) おお、広岡くん見て。見て見て見て！
…家がある。

高川、自分たちがいるすぐその上を指す。
広岡 おお、…家じゃあ。

高川 地図にあった避難小屋やいか！
広岡 避難小屋じゃあ！

高川・広岡 おおー！
やったー！

高川と広岡、ゴミの部屋の中を這いまわる。
広岡 食べもんがある！ いっぺえ！

高川 おお！ あるある！
広岡 誰か先に登っていった人の置いていったんじやろうか！

高川 弁当！
広岡 お茶！

高川 まんじゅう！
広岡 ケーキ！

高川 ビール！
広岡 おでん！

高川 なげわ！
広岡 りんご！

高川・広岡 チョコー！！！

宝島

広岡と高川、這いまわって漁って、まんじゅうの包みを開けたり、鍋の蓋をあけたりして、手づかみでむさぼり食う。

高川・広岡 ハア、ハア、ハア。

広岡 福長くん、チョコば食べんね。

高川 食べんねほら。

広岡・高川 福長くん福長くん福長くん

広岡と高川、福長の口にチョコを放り込む。たくさん。

福長 うえっ！！

広岡・高川 福長くん！

福長 広岡くん、高川くん。

福長、咀嚼しながら、チョコの甘さを確かめながら、喋る。

福長 今、夢は見よったったい。

広岡 夢？

福長 大学ん冬の夢ばい。下宿の、倒れて襲いかかってきて、ぐじゃくじゃになった柱

の骨の下で僕ら寝とって、手ば伸ばしよったったい。

そしたらの柱の隙間から手の伸びてきたたつたい。リーダーの手。

あっちからこっちへ。こうーやって。

福長、床に手を伸ばす。

福長 あ。

そこに内田の投げ捨てた100円ライターがある。

福長 ライター。

広岡 リーダーの使よーたんとそっくりじゃ。(少し笑って)

高川 何、どこにでもある100円ライターやいか。(少し笑って)

福長、ライターを擦ってみる。

小さな炎が出る。

3人 おお！（へらへら笑って）

広岡 ちよつとぬくい。

高川 燃えろよ燃えろ。

福長 キャンプファイヤーたい。

広岡 ワンゲル歌集第11番ヨーイ！（手を挙げて）

高川・福長 ヤッサー！（手を挙げて）

「遠き山に日は落ちて」（音楽なし）

広岡・高川・福長 ♪（Aメロ歌う）

避難小屋の奥から、お腹の大きい3人の女が歩いて来る。

3人の男、炎を消して、女たちを見ている。

広岡・高川・福長 ♪（Bメロ1フレーズ目歌う）

3人の女、お腹の中に抱えているものをとり出す。

広岡・高川・福長 ♪（Bメロ2フレーズ目歌う）

白いふつくらとした包みが出てくる。

おくるみに包まれた赤ん坊のようである。

宝島

広岡・高川・福長 ♪（サビ1フレーズ目歌う）
3人の女、おくるみを抱いてあやしながら、3人の男の元へ寄る。

おくるみをパタッとほどいて白い布をひるがえすと、
包まれてあったのは大量のレシート。
レシートはそこらじゅうに舞って散る。雪のように。

広岡・高川・福長 ♪（サビ2フレーズ目歌う）
3人の女、大きな白い布を旗のように振る。
布には真っ赤なりんごがひとつ、描かれてある。

3人の男たち、はためくりんごの旗を見ている。

広岡・高川・福長 ♪（サビ最後のワード歌う）
女子高生、たくさんその旗を振る。

福長、レシートのうちの一つを手取る。
あの手書きの山脈のレシート。

福長 な、何やらね。これ。

広岡 あ、地図じゃ。

福長 島の書いてある地図。

高川 この島、何島なにしまかいね。

広岡 何島じゃったつけ。思い出せん。

広岡・高川・福長 えっとえっとー。

女子高生 宝島。

女たち、白布を畳まれた布団の上に伏せてかける。

シーツを片付けるようにはためかせて。

○内田

ワンダーフォーゲル部員もそこにいる。避難小屋。

全員がその部屋にいる。

妻たち、まだ大量のレシートを手に取り、読みあげている。

読みあげてはゴミ袋に捨てていく。

妻 カップスター、ごつ盛り、一平ちゃん、

松下 生茶、からだ巡茶、

食堂の女 富士山麓天然水、六甲のおいしい水、

女子高生 ザ・テレビジョン、

コンビニの女 シティゴミブクロダイ、

旅の女 使い捨て電子ライター、

妻 あ…。

妻、降りつもった雪を払うように、敷布団の下にあったレシートを掻く。
そこに離婚届を見つける。

妻、離婚届を手にして、

妻 内田宏。

書かれてある名前を読む。レシートの物と同じように。

内田 ハア、ハア、ハア、ハア、

宝島

戸口に内田が歩いてくる。
山装備で、大きな登山ザックを背負って。熊よけの鈴をつけて。
全員、振り返る。
内田、帰ってきて、部屋の灯りのスイッチを押す。
電気が灯る。

終わり

ドボルザーク 「新世界より」 第2楽章 家路（遠き山に日は落ちて）
静かに。